

# 第1部

歴史的な建物と景観を活かしたまちづくり

上越市創造行政研究所 市民研究員

磯田 一裕  
木村 雅俊  
佐藤 和夫  
菅原 邦生  
関 由有子  
吉川 恵理子



# 第1章

上越市内の歴史的な建物



## 1 - 1 歴史的な建物からみたまちの姿

### 歴史的な建物からみたまちの姿

わたしたちのまち上越市は、豊かな自然に恵まれ、悠久の歴史が息づくまちです。

蒼い海、緑豊かな山々、広大な平野とそれらを形づくってきた川など、様々な自然環境を有しており、それらは四季折々の美しい姿を見せてくれます。特に冬の豪雪は、日本中でも広く知られたところであり、この地域の風土・文化に大きな影響を与えてきました。

また、この地域は、越後国府の時代から千年余の歴史を有し、越後の国の中心として、また日本の東西文化の交わる土地として栄えてきました。本市を含むこの地域一帯の都市構造の変遷を振り返ってみると、中世から近世にかけて、春日山城、福島城、高田城という三つの城がつくられ、そのたびに新たなまちが形成され、その姿を大きく変えてきたことが特徴的です。

現在の本市は、昭和46年の直江津市・高田市の合併により誕生したのですが、その姿の原型は、江戸時代の政治の中心である高田城を中心とした一大都市圏の形を色濃く残したものであるということが出来ます。

その範囲は現在の市域だけでなく、周辺市町村を含む頸城平野一帯に及ぶ広大なものであり、城下町、港町、平野部の農村、中山間地の農山村、街道筋の宿場町など様々な機能をもったまちから構成されていました。

以上のように、多様な自然・歴史的背景をもち、多くの都市的要素から構成されているこの地域には、様々な種類・用途の建物が建てられてきました。その大半は、私たちの生活スタイルや社会経済状況が大きく変化してきた中で、現代的な建物に姿を変えてきたものの、一方では、現在も昔ながらの姿を留め、現役の生活の場として機能し、それぞれの地域の個性的な町並みを形成する重要な要素となっているものも数多くあります。

### 調査方針

今回の調査では、歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりを進めていく上での前提条件の整理のため、はじめに市内に現存している歴史的な建物の把握と、それらをめぐる現状について調査を行いました。

調査範囲については、本市が多くの都市的要素から構成されていることを踏まえ、市域全体を視野に入れるものとし、調査方法は、市内に現存する歴史的な建物について所有者の方へのヒアリングや既存の文献調査を行いました。

調査対象となる「歴史的な建物」の判断基準は、概ね築後50年以上を目安とし、まちの歴史的景観形成に寄与しているものとししました。国の登録文化財制度では築後50年が要件となっていますが、本調査ではそれらの制度への登録を前提としたものではないので、厳密な区分けを行わないこととしています。なお、この50年という考え方については、今からおよそ半世紀前の第2次世界大戦を一つの時代の区切りとして、それ以後の戦後復興、高度経済成長により、わが国の社会経済構造がそれまでと大きく変貌し、それに伴って建物やまちの姿も大きく変わってきたことを考慮したものであります。

また、今回の調査は、基本的には建物を中心とした調査ではありますが、その建物が持つ歴史や真の価値を保存し、これからのまちづくりにつなげていくためには、まちの歴史的な文脈も幅広い視野から捉えておく必要があるため、建物以外の附属施設や周辺環境なども調査対象としています。

### グループ設定について

本章では、以上の考え方に基づき、市民研究員の皆さんの調査報告を取りまとめたものですが、その構成としては、収集した情報を地域別及びテーマ別のグループに大別し、さらに建物の種類とそれらに

まつわるストーリーを併せて分類した以下の 14 のテーマで整理しています。

地域別のグループでは、本市の古くからの市街地である「直江津地区」と「高田地区」、周辺の農山村地域や街道筋の地域を「その他地区」として整理し、テーマ別のグループでは、その他特徴的なテーマについて、「西洋風な建物」や「近代RC（鉄筋コンクリート造 建築）」建物の特徴的な装飾である「鏝絵」、都市の歴史を語る施設の一つとして「銭湯」を取り上げています。

【本調査で取り上げたテーマ】

地区別グループ
【直江津地区】
・直江津の町家と蔵座敷
・土蔵造りの寺院群
【高田地区】
・高田城址
・旧家中（武家屋敷）地域
・高田の町家
・高田の雁木
・寺町の寺院群
・陸上自衛隊高田駐屯地
【その他地区】
・頸城地方の農家住宅
・旧街道沿いの町並み
テーマ別グループ
・西洋風な建物
・近代RC 建築
・鏝絵
・銭湯

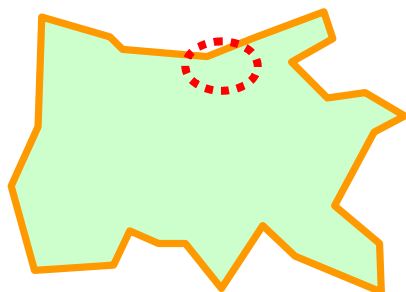
に特に身近な建物を中心としました。本市において歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりを進めていく上では、今後、以下のようなテーマについても同様の調査を行っていくことが必要と思われます。

【その他取り上げられなかったもの】

地区別グループ
・五智地区
・春日山城址
・福島城址
・宿場町（黒井、長浜）
・漁師町（有間川）
・ぶどう園周辺
テーマ別グループ
・寺社建築
・料亭

なお、市内に現存する歴史的な建物の数や種類は膨大であることから、今回の調査では、現在既に国、県、市の文化財などに指定されており、先行調査が実施されているものは調査対象から除き、これまで比較的取り上げられてこなかったものや、日常生活

## 1 - 2 直江津地区







## 直江津地区の歴史

直江津は、上越地方に所在した越後国府の中心として、また湊町「直江の津」として古くから栄えていたことが知られています。室町時代には守護所を多くの都の文人墨客が訪れ「越後府中文化」といわれる時代が続き、春日山城を居城に天下にその名を知られた上杉謙信の時代には、越後府中の人口は一説には6万人を数えたといわれています。

上杉氏に替わって入った堀氏が春日山城を廃して関川の東に福島城を築くと、政治経済の中心が今の春日新田周辺へ移動します。しかし、わずか7年にして、慶長19年(1614)松平忠輝によって城は高田へ移されます。高田築城は城下を移動させるだけでなく、関川に架かる橋をはずして街道を迂回させるなどの政策によって、高田は北国街道随一の城下町として繁栄することになります。その結果、直江津は急速に衰退し、高田城下の一外港のまちになっていきます。

長く都市機能を失っていた直江津も、北前船などの日本海海運による流通経済の急速な発達によって、次第に物流の拠点として船主や廻船問屋など財力を持つ人達が現れ、それを支える労働人口や商業が生まれて、幕末には日本海有数の海運のまちになりました。

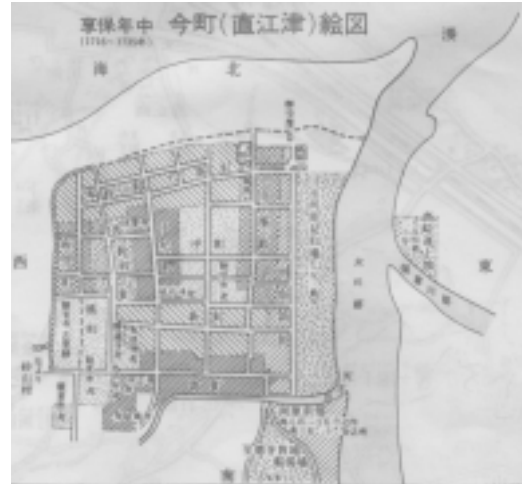
明治になると、大陸との貿易や北海道の海産物の集散地、また近代工業都市として発展していきますが、昭和40年代以降の経済の激変によって、旧市内の空洞化が急速に始まりました。

昭和46年、高田市と合併し上越市が生まれました。

## 町の構造

江戸時代に「今町」と呼ばれた「直江津」の原型になるまちは、北は日本海、南には古砂丘の裾から湿地帯が広がり、その西へ延々と続く古砂丘の東端にある関川河口に位置しています。

この「今町」と呼ばれた旧町内は、わずかな砂丘上にあるため、道路の直線距離が短く、坂道や十字路・丁字路がまちの構造をいっそう複雑にし、まるで「迷路のようだ」と表現する人もいます。そのため、高田地区のように約2キロメートルの直線道路が南北に3本も並び、連綿と雁木が接ぐ町家が続くようなまちの姿を見出すことはできません。



【図1-2-1 江戸時代の直江津の町】



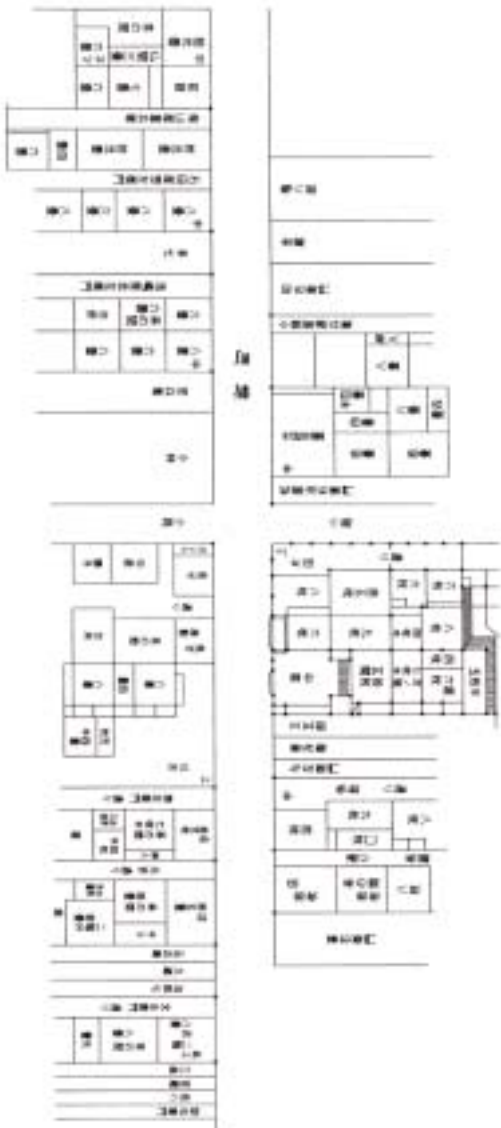
【図1-2-2 直江津の町並み(防風防砂壁)】



【図1-2-3 直江津の町並み(坂のある町)】



【図1-2-4 直江津の町並み(町家と雁木)】



【図 1-2-5 今町の様子】

福永家文書 市史叢書より

また、直江津を語るために欠かせないことがあります。それは火災が多く、記録に残る最古の明和4年(1767)から昭和6年(1931)までの間に23回、じつに7年に一度の割合で大火に見舞われているということです。そのうち、明治期には3年連続という大火が2度もありました。

大肝煎であった福永家に残された文書から、今町に暮らす人々が多様な職業を営む様子がわかり、絵図(福永家文書・高田図書館蔵)には、「町家」と呼ばれる構造の家が並び、雁木も設けられた町並みが描かれています。しかし、度重なる大火で、このような歴史的なまちの景観が次第に失われていき、さらに明治以降になると、港湾の発展や近代工業の進出によって、復興のたびに近代的な洋風建築や耐火性の高いレンガ造りの建物が出現したことも、古い「町家」が消えていった原因のひとつと言えます。しかし時代の大きな変化の中で、これらの洋風建築物も次々に姿を消していきました。また、直江津地区には、火災から本尊を守るため土蔵造りになっている寺が7カ寺あります。これもきわめて珍しいものと考えられます。

その他、防火のため、屋根が強制的に瓦かトタンに変えさせられた、明治41年の屋上制限令という異例の布達や、42年の雁木廃止条例なども、町の景観に少なからず影響を与えているものと思われます。

(磯田研究員、佐藤研究員)

【直江津のまちのストーリーと歴史的な建物】

まちのストーリー	歴史的な建物(建造物)	
火事のまち	土蔵造り	寺院、町家、座敷蔵
	レンガ塀	高達回漕店、ホテルセンチュリーイカヤ
	瓦屋根の町並み	屋上制限令
	街中に残る大木	火事で焼け残った木
浜風のまち	防風林(防砂林)	直江津中学校北の松林 国府小学校近くのアカシア林 八幡さまの社林
	風除けの板塀	船見公園付近の住宅
砂丘のまち	坂道	二段になっている道 道と道を結ぶ小路
歴史のまち	五智国分寺周辺	国分寺の建物群と土塁 越後一ノ宮の居多神社
	親鸞聖人ゆかりの地	光源寺、国府別院
産業のまち	湊町(海運業、工場)	倉庫の景観
	鉄道のまち	今は何も残っていない

(磯田研究員)

## 1 - 2 - 1 直江津の町家と座敷蔵 (担当：市民研究員 磯田一裕、佐藤和夫)

### 直江津の町家と座敷蔵の現状

罹災後の建物に焼け焦げの柱をそのまま流用していたことが後の建替えで分かった、などという本当も嘘ともつかない話が伝えられるほど、度重なる火災のために経済力が弱体化されていました。そのため耐久性が短く、昭和の後半から下水道工事などをきっかけに建て替える家が目立ち、古い町家がほとんど失われ、座敷蔵といわれる土蔵を持つ家も、今になっては非常に不便なため、建替えの折に取り壊されて失われているようです。

また、比較的古い町並みの姿を残していた関川左岸の通りが関川の改修のために失われたことも、高田地区のように、古い町家が残っていない原因のひとつと言えます。

### 直江津地区の「町家」造りの特徴

町家の地割は直江津も高田も、いわゆる「うなぎの寝床」といわれる間口が狭く奥行きが長い、短冊のような形になっています。

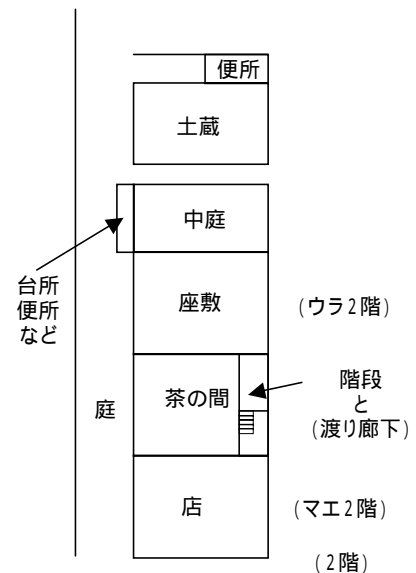
直江津では、間口が3間から5間(5.9~9m)、奥行きが8間から20間(14.4~36m)が標準ですが、さらに細かな地割も見られ、一方、高田の地割は、奥行きが直江津の倍近くあり、町家の造りもゆとりをもって造られています。

このような狭い地割のなかで、直江津では土蔵を持つ町家の比率が高く、昭和47年(1972)の時点で、旧直江津に369基の土蔵があり、そのうちの70%が江戸時代に今町と呼ばれた地域に集中していると報告されています。これは直江津が歴史的に大火が多く、防火上の必要から土蔵が多く造られたと考えることができます。

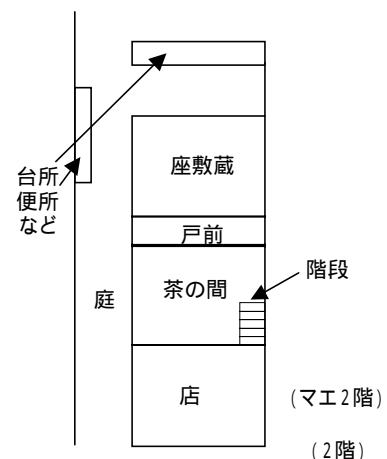
この直江津の土蔵のなかで特筆されるのは、荷蔵や道具蔵といわれる棟を別にする造りとは異なり、日常生活の場に「座敷蔵」(または「蔵座敷」)と呼ばれる特異な土蔵が設けられ、外見からは一棟のように見え



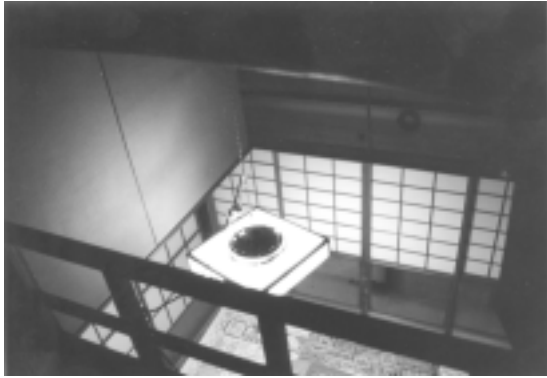
【図1-2-6 町家がある町並み】



【図1-2-7 町家の間取りの一例】



【図1-2-8 座敷蔵のある家の間取りの一例】



【図 1-2-9 渡り廊下から茶の間をみる】



【図 1-2-10 町家の内部】



【図 1-2-11 町家の内部】

る町家造りの家が存在したということです（土蔵そのものを住宅にしたものもあった）。その座敷蔵の内部は畳敷きになっており、仏壇や箆笥などの家財が置かれていました。

このような「座敷蔵」を持つ町家ができたのは、地割が狭く大規模な土蔵を造れないため、日常生活の場に土蔵を置かなければならなかったということが推測され、度重なる火災により極度に疲弊した経済状況にもかかわらず、狭い土地の中に富の象徴ともいえる「土蔵」をあえて建てようとしたのは、いかに火災によって財産を失ってきたかが想像されます。

しかし一方、その財産を守るべきこの座敷蔵に日ごろは家財道具も置かず、「仏壇のみ安置していた」という話もあり、防火のためだけの土蔵ではなく、一家のアイデンティティーである仏壇を守るということを最大の理由として建てた土蔵と考えることもできます。火事！ と言えば、「何を置いても」ご本尊や先祖の位牌を持ち出すという信仰深い土地柄が、比較的小さな家にも「座敷蔵」が設けられた理由の一つといえるでしょう。

### 建物の事例紹介

今回調査に伺ったIさん・Tさんのお宅は、明治39～41年にかけての大火以降の建築といわれ、T家は砂丘上のほぼ頂点に位置し、I家は旧中島町と呼ばれた町にあります。

T家は、小ぶりながらも店・茶の間・座敷（仏間）・土蔵の戸前が開閉できる程度の土間・土蔵と並び、三尺くらいの幅の庭と呼ばれる通路が奥まで通り、土蔵は本家の中に取り込まれています。

茶の間の吹き抜け部分には明り取りの天窓があり、前二階と裏二階を結ぶ中空の廊下と階段が設けられ、庭側には冬季に障子を入れられるようになっています。

吹き抜け部分は原型を留めてはいるものの天井が張られ、また土蔵の戸前を撤去して土間を広く使用できるようにし、風呂が造られるなど、変更がなされていますが、台所は庭に立って使用しています。

I家は、町家造りの基本を成すと思われる形式を留めています。

庭は、今は茶の間までで、奥は板の間にし台所・便所・風呂などが庭に下りて使用しなくてすむように改造されています。それ以外はほとんど建築当時のままで、吹き抜けの天窓や中空の渡り廊下など、良好に構造が残されています。また店には、昭和初期に流行したショーウィンドウや木製のショーケースが残されています。

### 座敷蔵のある家

前述のように火災から仏壇や家財を守るために設けられたもので、旧中島町のI家、砂丘の上のT家(両家とも町家のお宅とは別)に見ることができました。

I家は、店のあとに続く茶の間の位置に座敷蔵が設けられています。梁に「明治39年8月」と、上棟の日が記されているので、7月の1041軒を焼失した大火のわずか1カ月で上棟し、40年、41年の大火にも残ってきたこととなります。

茶の間のあるべき位置に土蔵があるのは、I家が商家であったため「商品をすばやく土蔵に保管するため」ということで、土蔵の内部に戸棚が作られています。これは、土蔵も店の一部として常時使用されていたものと考えられます。

最近まで畳敷きで仏壇が安置されていて、その名残に今でも先祖の遺影が飾られています。現在は湿気対策から板敷きにし物置に使用されているようです。

店の部分は現在車庫になり、土蔵が建物の一番前に位置し、玄関から居住スペースまで土蔵に沿っていくため、庭が板敷きに改造されているものの、大変不便だということです。

T家は、店・茶の間・座敷蔵という構造になっていますが、座敷蔵が生活に不便ということで、庭側に開口部が作られて庭もすべて板敷きにし、座敷蔵の部分を日常の生活にスペースにしています。また、茶の間は吹き抜けを改造して2階が作られています。

しかし、代々左官職人であるお宅は、手入れが行き届いた戸前が今も付けられています。



【図 1-2-12 上棟の日が記された梁】



【図 1-2-13 座敷蔵の入口】



【図 1-2-14 座敷蔵の入口】



【図 1-2-15 直江津の町家と雁木の町並み】



【図 1-2-16 直江津の町家と雁木の町並み】

## 町家と座敷蔵のこれから

町家・座敷蔵の町家のいずれも、いちいち庭に下りて台所や便所に行くのは不便であり、冬季は大変寒く、また土蔵によって採光が悪くなり暗く、先祖が苦労して建てたものであり愛着はあるが、できれば取り壊したいというのが本音といえるようです。

実際、新築したお宅のほとんどが、かつてはあったが「新築を機に取り壊した」または「蔵を取り壊すために新築した」ということでした。

これら町家の構造や座敷蔵が残されているのは高齢者のお宅であり、若い世代が住んでいけば逆に失われていたということもあり得て、「結果として残されているに過ぎない」という現実を目の当たりにせざるを得ませんでした。

また、町家の構造を残しているものの、ほとんどが住宅化されたため、店の部分が車庫などになっているものが目立ちました。

この調査で、

- ・一般家庭では家の記録を事細かに残すことがなく、住まいしている方々も高齢であるため「嫁にきたころはあった」というくらいの記憶で、自分の家がいつできたかわからない。
- ・自らの家が「座敷蔵」という直江津独特の構造であり、何故できたかについて注意を傾ける必要がなかった。

ということを感じました。上記のことから、自分たちの住んでいる「町家・座敷蔵の家」に興味を持ち、その魅力の再発見の喚起と、そこでどう生活し暮らしていくかという接点を真剣に考えることが必要と思われました。

これを機に今後、座敷蔵の悉皆調査が行われることによって、度重なる火災からいかにして財産を守るかという、直江津の人々の努力と生活の知恵の所産である「座敷蔵」の保存・活用の方向が見出されるのではないかと思います。

### 【参考文献】

- ・『郷土新潟県の生活風土』（直江津における「座敷蔵」）
- ・『直江津町史』『直江津こぼれ話』

### 土蔵造りの寺院について

再三述べているように、直江津は火災が多く、明治に限っても、31年から41年までに6回の大火に見舞われています。

火災は寺院にもおよび、『直江津町史』でも、明和4年からの火災を記録しています。その中で、江戸時代に今町と呼ばれた旧直江津のほとんどの寺院が、数回にわたって罹災しているのがわかります。ただ例外として真行寺と泉蔵院は、当時としては、今町の周辺から郊外にあったため、罹災していないようです。

これら寺院が、本尊や什物、檀家の過去帳を火災から守るため、土蔵造りという珍しい構造を生み出しました。

その構造は、土蔵を寺にしたというより、お寺を土蔵で造ったと表現したほうがよいような外観と内部を持っています。

ただこのなかで、真行寺は罹災しませんでした。ある時期、外装を土蔵に改めています。延寿寺は、改築まで木造であったが、什物などを収める土蔵が脇にあったといわれています。

以上、土蔵造りの寺院の詳細については、第2部の東京大学の調査報告で紹介することにします。

### 土蔵造りの寺院のこれから

各寺院とも非常に手入れが行き届き、大切にされている様子がかがわれました。

これら、土蔵造りの寺院が「群」として存在する例は、おそらく全国でも稀ではないでしょうか。火災という災禍が生んだ所産とはいえ、今では貴重な歴史遺産といえるでしょう。

どの寺院も観光の対象ではありませんが、それぞれの寺院の歴史、たとえば真行寺の「竹の雪」(謡曲にある)伝説、「義経記」の観音寺、芭蕉が「奥の細道」の旅で訪れた聴信寺、などをつないで、まちの人たちのための散歩コースを設定し、その中継点として、境内



【図 1-2-17 林正寺】



【図 1-2-18 真行寺】



【図 1-2-19 観音寺】



【図 1-2-20 聴信寺】

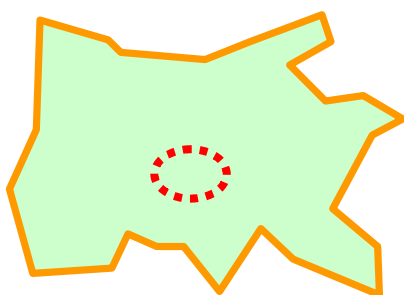
にベンチなどを設置させてもらい、休憩のスペースとして活用することは可能だと思われます。

【参考文献】

『直江津町史』・『直江津こぼれ話』



## 1 - 3 高田地区





## 城下町高田の歴史

先述するように、江戸期以前に越後国府の中心であった直江津と春日山から、それまで内陸部の原野に近かった高田の地に行政の中心を移したのは、徳川幕府による国家統治への布石ともいえるものでした。

慶長15年(1610)に徳川家康の六男である松平忠輝を福島城主に任じ、城下の移転に伴う町割と河川付け替えなどの大規模な土木工事を先行したと推測されています。城郭本体は慶長19年(1614)に現在の高田公園に完成し、その後松平光長時代(1624-1681)に町全体が最盛期を迎えました。徳川幕府の権力が安定期に入る時代で、乱世から太平への過渡期にあたり、築城の理念も従来の防備重視から佐渡金山や北国街道の要衝を押える親藩・譜代の拠点という位置付けに移行する時代背景があったといわれています。

その後、高田藩の歴代大名は比較的短期間のうちに交替させられ、度重なる天災と飢饉にも見舞われて、越後第一の藩でありながら実情は苦しい時代が続きました。

明治維新後は、町の経済基盤が衰退していく中で、陸軍第13師団を誘致して軍都の一面を持ち合わせながら、周辺町村との合併を繰り返して上越地域の行政と教育の中心になっていきました。

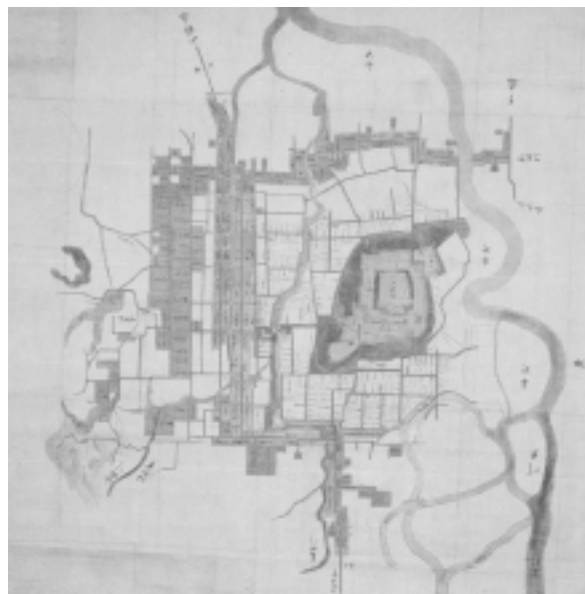
昭和46年に直江津市と合併して現在の上越市が誕生しました。

## 高田のまちの構造

築城時の都市計画に沿って、頸城平野の中心を蛇行しながら流れる関川を東の境界にして城郭を据え、外濠の外郭から城郭を凹字形に取り囲むように侍屋敷、町人町が形成されています。

また、加賀街道・信州街道・奥州街道の重要な街道が城下を通るように関川の橋を付け替えて街道を迂回させていました。城下町の常として、道の交叉点の食い違いやT字路、屈曲が多く見られます。

高田という町は、江戸時代からほぼ今日まで、頸城平野の農業生産(水田耕作)を基盤にして成立する「消費型の都市」であり、周辺地域の行政・教育・文化を担っていました。しかし、大規模な重工業などは発展せ



【図 1-3-1 榊原藩時代の高田城下】

上越市立高田図書館資料より



【図 1-3-2 高田の町並み (東本町)】



【図 1-3-3 高田の町並み (仲町)】

ず、明治末期から戦前までは「軍隊」による需要が町の経済を支えていた一面があります。

第二次大戦中に大規模な爆撃を受けなかったこともあり、まちの形は江戸時代の都市構造から大きな変化はありませんでした。また、豪雪に対処するため、市街地には後述する雁木が残っています。

戦後は、昭和40年代からの経済成長の波の中で、周辺地域からの人口流入と郊外へのスプロール現象が見られ、全国各地の地方中核都市と共通する道をたどりつつあります。

(関研究員)

### 【高田のまちのストーリーと歴史的な建物】

視点	まちのストーリーと歴史的な建物（建造物）	
地勢	地形の成り立ち ～平地、湿地帯、川～	自然堤防、青田川、儀明川の川筋景観
気候・風土	四季がはっきりしている ～夏蒸し暑く冬雪が降る～	雁木、雁木通り (平入り雁木の町並みと唯一の妻入り雁木) 現代の雁木(平成雁木)
都市の成り立ち	城下町高田 ～碁盤の目状にまち(道)を形成～	武家のまち・・・武家屋敷 商人のまち・・・問屋街、職人街の町家 寺のまち・・・寺町、参道景観
歴史的事業	エポックメイキングな出来事	江戸時代・・・用水事業 明治以降・・・鉄道の開通、第13師団の高田入場 地場産業、西洋文化の流入 (旧師団長官舎、高田日活、第四銀行など)
宗教	寺町	
文化	上越後の中心 ～文化、芸術、芸能、学問、遊び～	料亭や茶屋など高田の粋をはぐくんだ建物 (浮喜世、長養館など) 学校(大町小学校など)

(磯田研究員)

### 高田城址と高田公園の歴史

現在の高田公園一帯は、慶長年間の高田開城に始まる城郭建築と、関川の流れを変え、青田川や儀明川を改修して築いた濠と土塁などの構築物からなる遺構です。近世の城郭建築は度重なる災害と財政難から縮小されて、明治維新を迎えました。本丸御殿は明治3年に全焼した後、再建されることなく、焼け残った三重櫓や門などの木材と石材は明治中期に民間に払い下げられました。跡地は陸軍省の所有となり、明治40年に軍用地として献納し、陸軍第13師団を誘致しました。土木工事で土塁の一部が撤去されて、その土砂で外濠の一部が埋め立てられました。師団の司令部や将校集会所であった洋風建築の偕行社があり、終戦まで「軍都」の中枢でした。

当時、師団入城を歓迎した「在郷軍人団」が中心となり植樹した、2200本のソメイヨシノが今日に続く桜の名所になっています。また外濠では一時、水田耕作・レンコン栽培・食用カエルの飼育が行われていましたが、現在は護岸も整備されて、観賞用の蓮池に水鳥や淡水魚が生息し、市街地における貴重な野生生物の拠点になっています。戦後は都市計画公園（昭和23年決定、約50haで市内最大面積）に指定され、文化・スポーツ施設が整備されて市民の公園として広く親しまれています。

### 高田公園の現況

公園指定地外では、本丸跡地に上越教育大学付属中学校、北東の狐丸跡に県立高田工業高等学校と城東中学校（旧陸軍弾薬庫跡地）、西側に上越総合庁舎と春秋会館、北側に森林管理署（旧営林署）の建物があります。公園内には公認陸上競技場、野球場・相撲場・プールなどの運動施設、厚生南会館・総合博物館・小林古径邸・高田図書館などの文化施設と忠霊塔や多くの記念碑があり、平成5年には江戸時代の城郭を模した三重櫓が復元されました。西堀橋とブロンズ像を設置したプロムナード、桜の品種展示を兼ねた東三の丸広場



【図1-3-4 稲葉丹後守様時代 高田城図間尺】

写真高田風土記より



【図1-3-5 復元された高田城三重櫓】



【図 1-3-6 東京から復元移築された小林古径邸】



【図 1-3-7 煉瓦造の門柱】



【図 1-3-8 公園内の売店】



【図 1-3-9 公園内の遊具】

や忠霊塔前芝生広場の東屋などが整備されてきました。また、師団入城以前に本丸南正面に架けられていた橋の橋脚と礎石の発掘調査に基づき、平成 14 年春に木造の「極楽橋」が復元されたところです。

### 高田城の特徴

高田城は江戸城を模した平城ですが、石垣や天守閣はなく、濠を掘削した土砂で土塁を築き、三層の櫓をシンボルとしていました。中核の本丸御殿は大名屋敷の典型として、南東の「表」から「中奥」を経て北西の「奥」へ雁行しながら進む殿舎構成となっていました。昭和 59 年の発掘調査で奥台所付近の礎石とカマド、井戸の遺構が発見されました。

(高田城本丸学術調査研究報告書・平成 5 年構造計画研究所・文化環境計画研究所著・上越市教育委員会発行より抜粋)

### 高田公園のこれから

#### ～今後の公園整備についての提案～

高田公園一帯は、「桜と歴史の城下町」をテーマにした「市民が誇れる顔づくり」の一環に位置付けられ、歴史遺産の保存・活用もその一つに挙げられています。今後の公園整備に当たって 5 つの点を提案したいと思います。

#### 公園施設のあり方

旧偕行社跡地に、東京都大田区に残されていた高田出身の日本画家・小林古径の旧宅（昭和 9 年築・吉田五十八設計）を復元移築し、平成 13 年から公開しています。地域全体の歴史的文化的財として、一層の広報と活用が望まれます。

園内には戦前までの古い建築は残っていませんが、濠や土塁という構築物自体が城郭を偲ぶ文化財です。陸軍師団時代の煉瓦造の門柱が残されていますが、適切な維持管理がなされているとはいえない状況です。西堀橋からのアプローチであり、歴史を語る遺構として門扉を復元し、保存整備を図りたいものです。

この門柱を入ると、簡易な売店と自動販売機が設置されていますが、安易な発想であり、歴史的な景観に配慮されているとはいえません。また、付近に設置され

た遊具類は、休日のイベントなどで家族連れが訪れる図書館側の芝生広場に移転した方が効果的であると考えられます。

三重櫓は有料施設ですが、桜の時季以外は閑散としています。四季を通じて市民にもっと有効に利用されるような運営手法はないのでしょうか。たとえば、現在は散策の合間にゆったりとお茶を飲むような場所が見当たりません。北側の休憩所や公衆便所は既に城郭建築を連想する外観で整備されていますので、今後の施設整備にあたり、統一感のあるデザインを検討していくべきでしょう。

それに続く本丸跡地は、旧陸軍司令部が新潟大学高田分校に転用された後、上越教育大学付属中学校が建設され今日に至っています。かつての城郭の中核であり、現在も都市公園の中央部ですから、都市公園に編入して市民に公開できるよう、施設の移転を検討すべきではないでしょうか。また、跡地での施設建設を急がずに、史料と発掘調査の成果を吟味し、空間そのものを郷土の財産として将来に伝えられるように、市民主体の議論を積み重ねていくべきだと考えます。老朽化した施設の移転や新築についても同様です。

### アプローチ手法と交通問題・駐車場整備について

司令部通の延長である市道本町鴨島線が、既に公園を南北に二分しています。国道18号へのアクセスと鴨島から牧村につながる広域幹線として交通量が多く、公園付近では歩道拡幅と電柱の地中化工事が進行中です。しかし、公園への主要なアプローチでもあり、運転者に「公園内を走行している」という意識付けを行い通過車両の減速を促すとともに、街路樹や街路灯、適切なサイン計画の充実が必要と思われます。

公園周辺の各施設に駐車場があり、観桜会や大型イベント時の駐車場としては、周辺の公共施設を一時的に借りて対処しています。遊歩道の環境整備を進めるとともに、休日には広くなった歩道でのフリーマーケットなど、歩いてアプローチするのが楽しくなるような環境にしたいものです。



【図 1-3-10 公園内の公衆便所】



【図 1-3-11 本丸跡地の学校施設】



【図 1-3-12 まち中の貴重な緑】



【図 1-3-13 春の観桜会】

## 緑地を中心とする自然環境の保全と相談所

公園一帯は既成市街地の中のまとまった緑地で、サクラ・マツ・スギを中心に雑木も豊富で、野鳥も見られます。しかし、高木類の老齢化が進み、虫害による枯死や風雪で倒壊する樹木も多く、雪囲いや支柱を必要としています。その土壌は踏み固められて保水力が低下し、降雨後の排水も良好とはいえません。濠にも多種の水鳥と水生生物が生息していますが、周辺にゴミが散乱しています。環境問題に関わる市民団体と連携しながら、この土地本来の植生を取り入れた緑地景観の形成を検討して、「私たち自身の郷土の森」を育てていくという意識づけを啓発していく必要があります。

また、市民の植栽造園に関する相談所などを設けて、その企画運営を民間団体に委託し、市民が気楽に訪れて地域の緑の環境づくりに参加できるようにすることもこの公園に求められる役割であると考えます。

## 観光資源としての見直し

春の観桜会が最大の観光イベントですが、市外から観光バスで来場する団体は、一時を過ごした後に他の場所に移るという日程で、市域全体への波及効果は低い状態です。公園を拠点とした中心市街地や他の文化財・施設にも効果が波及するような、魅力的なルートづくりを目指したいものです。

また、この観桜会は年を追うごとに、露天数や夜間照明が増設されて賑やかになっているようです。それに比例して発生する膨大なゴミ処理と園内清掃については、はたしてこのままでよいのかと考えざるをえません。僅か2週間ですが、大掛かりなイベントになり、環境保護と都市美観の視点からも再考すべきではないでしょうか。

## 防犯と安全対策

公園は災害時の広域避難広場であり、複雑化する社会情勢の中で、防犯と安全対策も重要な視点です。管理事務所に遠隔監視機能を集中して、少ない人員で行き届いた管理運営を行うべきでしょう。



### 旧家中の歴史

城郭の周囲や要所には重臣の屋敷が構えられ、その間を一般の侍屋敷がしめ、下級士族の長屋も点在していました。さらに城下町防備のため、西縁の寺町通に接する現在の信越本線線路敷にも下級士族の住居が配備されていました。時代による変遷はありますが、寛文の大地震後の復興期が城下町の最盛期といわれています。その後、小藩時代が続く中で、現在の北城町・東城町の一部が払い下げられて水田になっていましたが、昭和47年に土地区画整理事業が完了して宅地化されています。

### 旧家中の現況

他の城下町と同様に、旧武家屋敷地には教育・行政施設が集中しています。昭和30年代に、現在の上越大通りが国道18号として旧家中を分断してから、主要国道として交通量が増大し沿道には業務施設も建ち並んでいますが、一歩入り込むと石垣や生垣が連続する中に屋敷林も随所にみられ、成熟した住宅街が形成されています。

近年は、中心市街地住民の高齢化と世代交代の進行で、住宅の建替えや共同住宅の建設につれて敷地の分割が進んでいます。

### 旧武家屋敷の残存状況

江戸時代の侍屋敷はかろうじて昭和30年代まで残っていましたが、今日では残された写真からその様子をうかがうばかりです。後ほど紹介する「無量庵」は居住用に改修されてはいるものの、江戸期の侍屋敷の遺構で内部には昔の面影が色濃く残っています。

また、西城町4丁目には江戸時代から高田藩の製米をしていた旧家の家屋が残されています。何年か前までは、青田川沿いに水車も残っていたそうです。



【図 1-3-14 旧家中地域】

写真奥の木々が茂る地域（手前は町家地区）



【図 1-3-15 位置図】



【図 1-3-16 武蔵野酒造】



【図 1-3-17 武蔵野酒造の土蔵】



【図 1-3-18 楽酔亭】



【図 1-3-19 和風住宅】

## 現存する建物と町並み

### 酒造会社の蔵と庭園（西城町 4）

大正 5 年、初代が当地にあった「武蔵屋」を買収して酒造会社を創業しました。敷地内には古い酒蔵や出稼ぎ杜氏の宿泊所、昔の事務所などが残っています。また、敷地内には江戸時代の侍屋敷が残されていましたが、平成元年の新社屋建設時に撤去されて、その材木や建具を新たに「楽酔亭」の造作に再利用しています。道路拡張に伴い、石垣は後退していますが、前庭と中庭の樹木は保存されて当時のたたずまいをうかがうことができます。

### 細幅会館と和風住宅（西城町 1・北城町 3）

ともに大正 2 年に建築された知命堂病院創設者の住宅で、後述する細幅会館はその応接室でした。

洋風建築に隣接して建てられていた 2 階建の和風住宅の一部は、F 家が譲り受けて、昭和 35 年に上越大通り沿いの現在地に移築されました。重厚な瓦葺入母屋の屋根と下見板張りの外観が目を惹きつけます。内部には、玄関ホールの板の間から厚いケヤキ板の階段があり、2 階は和室 4 部屋と 1 間幅の廊下付、ガラス窓は 1 本溝で戸袋に繰込む形式で、窓手摺等に凝った意匠が見られます。



【図 1-3-20 細幅会館】

## 無量庵（西城町1）

江戸時代後期の漢学者の屋敷と伝えられていますが、所有者の手元には図面や記録は残っていません。

昭和初期に先代が一带の敷地と共に購入し、手入れと改修を施しながら住居として使用してきたそうです。そもそも高田城が平城であったことから殿様より高くてはならない。また床下に賊が忍ばないように基礎も低く、外壁も真っ黒に塗っていたという話をうかがいました。

第二次世界大戦中には、「日本憲政の父」と呼ばれる尾崎行雄（号堂翁 1858-1954）の疎開先になり、その庭には築草園があったそうです。「無量庵」という庵号と額は尾崎行雄の命名によります。

屋根をトタン葺きに、木製建具をアルミサッシにしたほか、トイレの水洗化、西側の納戸の改築などが変更されています。昭和61年の豪雪で東側に付属していた台所廻りが崩壊しました。住居は北側に新築して以降は、茶席や展示会場として使用されています。

今回の調査でこの建物の平面図を作成したものが図1-3-23ですが、ここで驚くべき発見がありました。

既存の文献資料によると現存していないとされる小倉佐市郎邸の間取りが、この無量庵の以前の間取りとまさに一致し、昔は小倉氏の所有であったということです。今後両者の関係を調査できる機会があれば、無量庵の建築年代や来歴が判明するかもしれません。



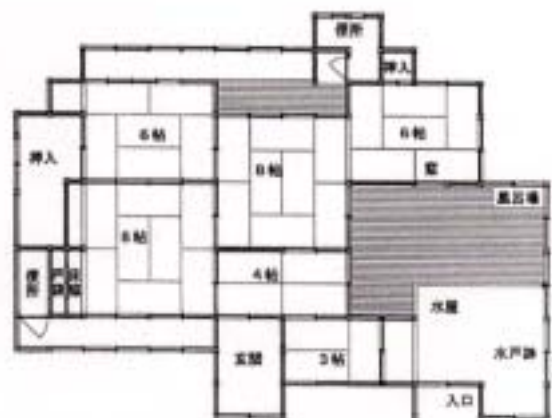
【図1-3-21 無量庵外観】



【図1-3-22 無量庵内部】



【図1-3-23 無量庵現況平面図】



【図1-3-24 小倉佐市郎（250石）邸平面図】

（現存していないとされる建物）

稲荷弘信著 高田風土記より



【図 1-3-25 旧家中の住まい（西城 3）】



【図 1-3-26 旧家に残る土蔵（西城 3）】



【図 1-3-27 旧家中の住まい（西城 4）】



【図 1-3-28 旧家中の住まい（南城 1）】

### 青田川左岸沿いの住宅街（西城町 3、4）

上往化橋から青田川を遡り、司令部通に至る道沿いには閑静な住宅街が続きます。昭和初期には「旧家中住まい」が一種のステータスシンボルと見なされていて、広い敷地の既存家屋を買い取って、市内の他地域から移ってきた例も見られます。

明治初期から大正期の建築も残されていて、母屋以外にも土蔵や茶室、石垣・造園植栽に時間の蓄積が見られます。

### 青田川右岸沿いの住宅街（南城町 1）

旭橋から南土橋付近で屈曲する青田川右岸には、石積擁壁の上に住宅が建ち並んでいます。築城時に青田川の流れを変えて堤を整備した名残だということです。その後の河川改修の折にも、川底の土砂を浚って土手を盛り上げていましたが、一帯の地主であったM家が斜面地を利用して葡萄栽培を行っていました。戦後に売却されてから、各戸でそれぞれに石積擁壁を築いたものです。

葡萄園時代の別荘として使われていた築 90 年ほどの 2 階建の建物が今も残されています。内部は和風造作の座敷で、外壁はトタン張りに改修されていますが、瓦葺屋根の洋風鬼瓦が印象的です。

また、近くには空き家となっていますが、昭和 50 年代まで医院として使われていた建物も、土蔵と竹藪の広い敷地と共に残されています。

### 高田高校裏の住宅街（南城町2）

高田高校グラウンド南側住宅地も武家屋敷地の名残の大きな地割が一部に残り、石垣や竹藪などの植樹が保全されています。しかし、所有者の移転などで老朽化した建物や庭園が撤去された後、敷地が分割されて、共同住宅が混在する住宅街に変貌しつつあります。



【図 1-3-29 旧家中の住まい（南城2）】

### 上越大通り沿いの住宅街（南城町3）

明治4年の廃藩置県を契機にして、旧士族層の有志が、困窮する藩士の精神的より所として、榊原藩主を祀る榊神社を旧対面所跡地に建立しました。その一部には解体された高田城の木材・石材が再利用されたそうです。現在、社殿地の樹木は鬱蒼と繁り、高田公園に連なる市街地の緑地環境として重要な蓄積になっています。榊神社から南濠に至る地域は城の大手前に位置し、光長時代の家老である小栗家、荻田家など重臣の屋敷がありました。旧城南中学校の敷地に石碑が建てられています。



【図 1-3-30 榊神社】

また、上越大通り沿いのM家は昭和初期の良質な木造住宅で、和洋折衷の重厚な意匠が見られるとともに、石垣や植樹が落ち着いたたたずまいを残しています。

### 北城町から東城町（関川左岸地域）

北城神明宮は松平光長時代に高田に遷座されました。当初は旧幸橋付近にありましたが、寛文地震後に、城の鬼門にあたる現在地に移りました。



【図 1-3-31 旧家中の住まい（南城3）】

拝殿は火災で焼失後、明治29年再建、本殿は昭和15年に新築されたものです。境内には芭蕉句碑・文学碑等が多く残され、鬱蒼とする樹木と石垣が「鎮守の森」の風格を醸成しています。

一帯は江戸時代中期以降の小藩時代に家中が縮小されて以降、戦後まで水田になっていたそうです。



【図 1-3-32 北城神明宮】





### 寺町まちづくり協議会の住宅に関するガイドライン

建物全体：特に道路から見えるところは、寺町にふさわしい形態や色にしましょう。

建物規模：住宅は通常2階建まで、非住宅は通常3階建までとしましょう。

屋根：陸屋根はできるだけ避け、勾配屋根としましょう。(切り妻、寄棟、入母屋がのぞましい)屋根の色は、寺町に調和する、落ち着いたものにしましょう。(黒、濃茶、濃緑が望ましい)

外壁：寺町に調和する材料や色を使いように努めましょう。(茶系、灰色系が調和しやすい)

ガレージ：入口はできるだけシャッターを設けましょう。(色は外壁と同系色が調和しやすい)独立型は、できるだけ勾配屋根とし、外壁の仕上は母屋に合わせましょう。

庭・樹木：みどり豊かな寺町の環境づくりのために、できるだけ植栽を施しましょう。

道路と宅地の境界：生垣や木製・竹製の塀をできるだけ長く設けるように努めましょう。

建物全体：特に道路から見えるところは、寺町にふさわしい形態や色にしましょう。

建物規模：住宅は通常2階建まで、非住宅は通常3階建までとしましょう。

屋根：陸屋根はできるだけ避け、勾配屋根としましょう。(切り妻、寄棟、入母屋がのぞましい)屋根の色は、寺町に調和する、落ち着いたものにしましょう。(黒、濃茶、濃緑が望ましい)

外壁：寺町に調和する材料や色を使いように努めましょう。(茶系、灰色系が調和しやすい)

ガレージ：入口はできるだけシャッターを設けましょう。(色は外壁と同系色が調和しやすい)独立型は、できるだけ勾配屋根とし、外壁の仕上は母屋に合わせましょう。

庭・樹木：みどり豊かな寺町の環境づくりのために、できるだけ植栽を施しましょう。

道路と宅地の境界：生垣や木製・竹製の塀をできるだけ長く設けるように努めましょう。

【図1-3-33 寺町まちづくり協議会のガイドライン】

## 旧家中地域のこれから

### ～旧家中地域の景観形成のあり方の提案～

#### 背景と目的

城址を囲むこの地域は、住宅地と緑地がバランスよく分布する成熟した市街地を形成しています。交通ターミナルや公共施設、商業施設が手近にあり、高齢者でも住みやすい環境の基盤は整っています。居住歴の長い世帯が多く、近隣との関係もその時間の中で築き上げられてきました。地域コミュニティ活動は継続的で地道なものです。反面、諸活動や景観保全については現状維持が主流で、波紋を呼びそうな積極的意見は出し難いようです。

また、住民の高齢化と地域外への移転で、手入れのされない空き家と庭が残されます。その後は駐車場となり、敷地が細分化されて建蔽率が上昇し、特に道路側の緑地が減少していきます。それぞれの自助努力で景観保全に寄与している住民も多い中で、さらに一歩

地域コミュニティのあり方にまで踏み込み、歴史的な価値観だけにとどまらず、良好な生活の基盤を次世代にバトンタッチしていくことが最大の課題であり、ひいては市街地景観の向上につながるものと考えます。

#### 提案

##### 交通と道路

関川左岸沿いに都市計画道路(高土町東城町線延長3km)の指定があり、北城町部分と自衛隊東側が施工済みです。今後は、既に住宅の密集する東城町部分で地割と路線との整合性を見直すべきではないでしょうか。公園を通過する本町鴨島線とあわせて、歩道の幅と植樹エリア・街路灯・バス停・サイン・ゴミ集積所などにも、地域の歴史を反映する町並み整備のガイドライン作成を期待します。

住宅地内の狭い道路は、積雪時には危険が伴います。地域の状況に応じて安全対策を検討する必要があると考えます。また、河川水加温による消雪設備が一部で採用されています。試験結果と考察を公表して、将来の道路計画に役立てていくことが望まれます。

## 河川整備

この地域を貫く青田川の整備は、新潟県の事業で進行中ですが、周囲の環境に一層配慮して計画されることを望みます。手摺やガードレールが必要な箇所には、標準的なスチール製でなく、自然環境に調和する素材と歩行者に配慮したデザインを取り入れたいものです。

## 住宅の外構と外観

石垣・生垣・樹木を保存していくと同時に、維持管理にかかる費用の補助などが挙げられます。また、庭の広いお宅では樹木の枝や落ち葉の処理が大変だという声を聞きます。敷地内での焼却や日時を決めた上での搬出などに行政の協力が求められると考えます。

住宅の外観については、個人の所有に帰するという前提で、統一することは困難でしょう。特に、地区計画や建築協定などの法的規制は、既存街区において受け入れ難いものです。ガイドライン的な誘導により、色調と形態、道路からの後退と緑化帯設置に強力を求めていくことが重要です。

集合住宅の建設の場合は、条例による指導が実行されている自治体も多いので、検討に値すると考えられます。



【図 1-3-34 青田川沿いの景観】



【図 1-3-35 河川沿い整備のイメージ】

## 大規模建築の果たす役割

地域内にある公共建築には、行政の管轄を越えて、既存住宅街の良好な景観に連なる外観と外構の整備を期待します。特に、広い駐車場を設置する場合には公開緑地を確保し、建物の意匠や色調については、計画段階から公開して市民の賛同を得られるように進めてほしいものです。

あわせて、大型商業施設の新築や改修にあたり、景観条例を活用し、色彩・サイン・植栽について景観の向上を求めていくべきだと考えます。

## 克服すべき課題

住民サイドの最大の課題は、景観だけの問題ではなく、そこに住み続けることができる環境と経済的な裏づけを見出すことです。

しかし、移転や売却がなされた場合には、開発許可と行政指導で景観を保全していくことが可能かどうか、十分に検討を重ねることが求められます。行政の立場で一方的に行うことがベストとは限りません。まちづくりに関わる非営利組織が相談の窓口となり、有効な助言と援助を行うことができるような体制づくりも今後の課題ではないでしょうか。

そのためには地域ごとの住民の話し合いに加えて、まずは上越市全体でまちづくりへの理解を深めるとともに、多数の賛同を得られるようなビジョンと、そのための具体的な方策を詳細に見直し、市民の意見を集約していかなければなりません。



### 高田の町家の成立

高田城築城と同時に、その防衛を目的とした都市計画に基づき、道路沿いに現代まで息づく町家なるものが形成されました。

町家は、道路に面する間口を基準に税を徴収するという経済的側面から、うなぎの寝床と言われるように間口が狭く奥行きの極端に長い、店舗併用住宅として成立してきました。



【図 1-3-36 本町 6 丁目の町家】

### 町家の現況

町家は、現在も高田地区市街地に多数現存し、生活の場として利用されています。外観や内部ともに古くからの姿をそのまま留めているお宅がある一方で、入口を車庫にしたり、吹き抜けに天井を張ったりして現代の生活に合わせて改造しているお宅などその様子はさまざまです。

町家の事例紹介については、第 2 部の東京大学の調査報告にて詳しく紹介することにします。



【図 1-3-37 本町 2 丁目の町家】

### 町家の特徴

#### 間取り

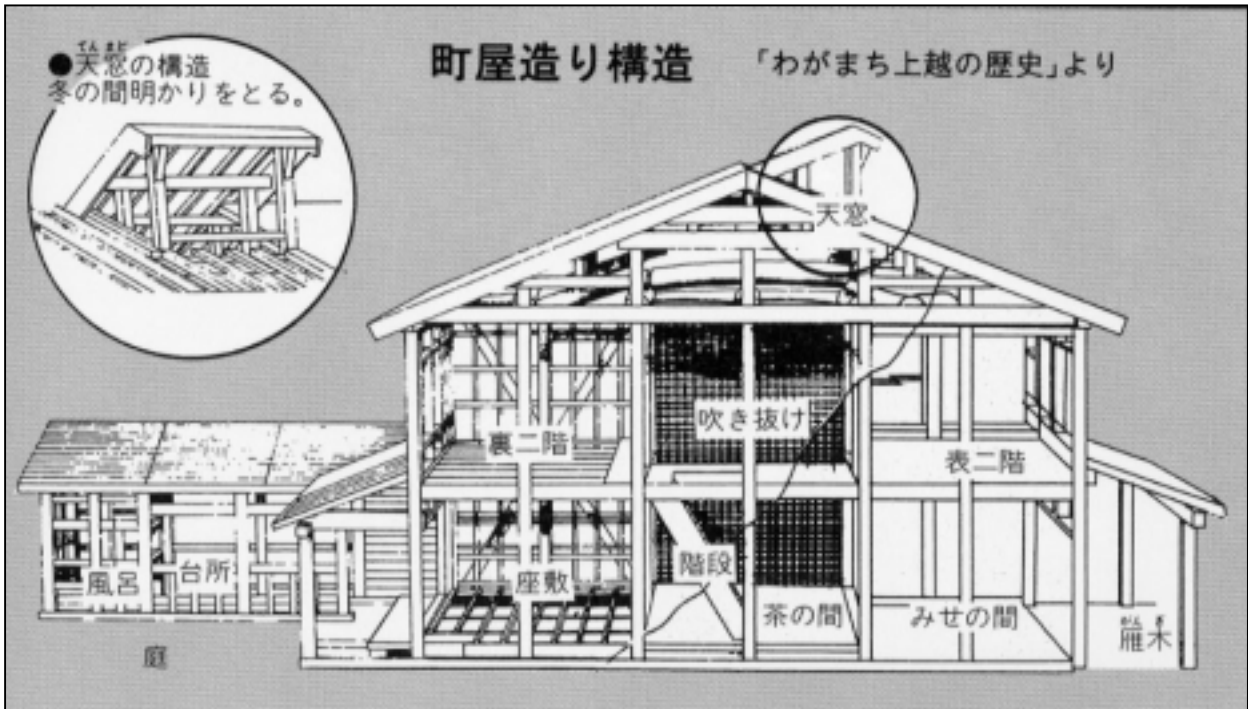
当然、前面道路に面した部分は店舗、次に茶の間、座敷へと続き、裏の台所や便所に通ずる通し土間が廊下の役目を果たしていました。特に高田のように豪雪地帯の場合は、私有地を町の共有空間として提供し道路側に雁木を設け、冬期間でも人の往来の便をはかり、町としての機能を保っていました。



【図 1-3-38 大町 5 丁目の町家】



【図 1-3-39 町家の間取りの一例】 越後高田の雁木より



【図 1-3-40 町家造りの構造】

「上越市観光事典」より

### 構造

構造的特徴としては、町家の経済力や権威の象徴として、店と茶の間の間に、または茶の間と座敷の間にけやきの大黒柱を配し、その大きさや太さを誇示し、茶の間は吹き抜け空間とし、二階の座敷やつし二階との空間的連続性を保っていました。特に高田の場合、南北側が隣家に接し、採光、通風ともに住宅としての機能に欠ける部分があり、茶の間の吹き抜け部分の天窓や中庭を設けることで、その機能を補っていました。なかには、庭園風にあつらえた中庭もあり、住宅としての安らぎを求めた商家形成も見られました。



【図 1-3-41 町家の内部（吹き抜け）】



【図 1-3-42 町家の内部（渡り廊下）】

### 高田の町家のこれから

#### 町家を取りまく環境

江戸時代から続く町家、いわゆる店舗併用住宅は、現代のモータリゼーションと郊外型ショッピングセンターの出現により、商店としての機能を失っています。また、後継者たる若い人たちは、郊外の新興住宅地へ移り住み、高学歴社会もその後押しをして、小売店舗の後継者が育たない環境を作り出しています。結果、旧町家には住宅としての機能だけが残し、65歳以上の高齢者世帯が半分以上を占めるようになり、いきおい建物の改修もままならず、老朽化や防火上の危険性も益々増えています。

## 町家再生へ向けた提案

旧町家を再生させる方法の一つとして、店舗併用住宅の機能から、まずは住宅地への転換を考えるべきだと思います。夜間人口を増やすことで、そこには新たなもより店舗や公共施設が充実してくるでしょうし、全体として人口の減少が見込まれる今後、社会資本の有効活用に一役かうことができると思います。また、住宅地としての大切な機能の一つとして、いわゆる Door to Door の機能は避けて通れない現代となっていることも、まちづくりの一つとして忘れてはならないと思います。

また、町家群の特徴の一つとして、先にも述べたように、道路に面した部分が狭く、奥行きが長い敷地構成が連続する形となっていて、町の魅力でもあり、人間が居住する空間の魅力でもある外部空間と建物内部空間の連続性が、町家群には全く配慮されていません。

よって、住居としての魅力も欠いてしまっている現状をみると、その敷地の利用計画を面的にとらえて、地区全体として再開発を考え直さないと、魅力的なまちづくりは難しいように思えてなりません。



## 1 - 3 - 4 高田の雁木

(担当：市民研究員 菅原邦生)

ヨーロッパに限らず日本にも、都市空間を演出する魅力的なア - ケ - ドがあります。雪国における雁木通りは、その代表的なものの一つです。雁木通りは、深雪対策として設けられた歩行者用の通路で、個々の町家の雁木が町並みに連続することで形成されます。

雁木通りは、歩行者用の通路として利用されるだけでなく、地域のコミュニケーションの場として、住民の会話の場所や子供たちの遊び場となるなど多様な機能をもっています。一方雁木通りは、公共の通路として利用されるにもかかわらず、私有地のため課税の対象とされ、維持管理にかかる費用も個人負担であるなど、多くの問題を抱えています。

### 雁木の形式について

雁木の構造は、下屋構造であり、主屋と構造的に別れていることが特徴です。これは積雪により破損したとしても簡単に修復できるという利点があります。

さらに雁木の形式には、一階の高さにあわせて庇をつけその下を雁木通りとする落し式雁木と、厨子二階あるいは二階下を雁木通りとする造り込み式雁木に大別することができます。

### 全国的な視野からみた高田の雁木

ここでは、雁木や雁木通りについて、全国的な視野から、紹介しましょう。

高田の雁木通りは、氏家武博士の研究によれば、明治末期から大正初期の最盛期において全長 17.9 km とされ、同氏の 1966～1974 年の調査では 15.7 km であり、筆者の 2000 年の調査でも、氏家氏の 1966～1974 年の調査結果と比べ変化は少なく、雁木通りの保存状態は概ね良好といえます。現在雁木通りは、本町 1、2、6、7 丁目、仲町通り、大町通り、南本町通り、北本町通り、東本町通りに存在します(その他、稲田、戸野目、直江津地区にもあり)。高田の雁木通りは全国で最も長く、高田は雁木通りの町として知られています。



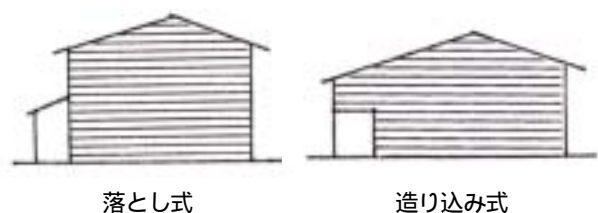
【図 1-3-43 雁木のある町並み (本町 6)】



【図 1-3-44 雁木のある町並み (本町 2)】



【図 1-3-45 雁木通り (本町 2)】



【図 1-3-46 雁木の形式】

雁木通りは、青森県、秋田県、新潟県、長野県北部など日本海側を中心とした広い地域に分布し、現在46市街地に形成されています。

近世における雁木通りの分布をみると、74地域に形成が確認されます。雁木通りは、積雪時の歩行者用の通路として利用されるものの、深雪地域のすべての町に存在する訳ではなく、建設された町は地域的なまとまりをもちます。また雁木通りは、地方によって、さまざまな呼び方がされています。その大半を占める「小見世通り」、「小間屋通り」、「雁木通り」、「仮屋通り」の分布を呼称別にみると、

「小見世通り」(青森県の北部と東部、岩手県の北部と中部、秋田県の全域)

「小間屋通り」(山形県の中部と南部)

「雁木通り」(新潟県の中部と南部、長野県の北部)

「仮屋通り」(鳥取県の東部)

となります。

図1-3-47には、深雪地域における雁木通りの分布と同じ地域において、雁木と同型の庇と庇柱によって構成された庇下空間をもつ、現存する近世の民家(農家と町家)の分布を示しました。

庇と庇柱によって構成された庇下空間をもつ農家は

宿場町に確認でき、庇と庇柱によって構成された雁木と同型の庇下空間をもつ町家は、城下町・宿場町・市場町・港町に確認できます。

これらの分布を、呼称をもとに分析すると、雁木の祖型は、以下の2類型となります。

「雁木」「小間屋」とよばれる地域

宿場町に建設された雁木と同型の農家の庇が祖型であった。

「小見世」とよばれる地域

城下町や市場町など商業機能を中心とした場所で発生した。

### 全国の雁木通りの現況

つぎに各地の雁木通りの歴史について、城下町を中心にみてみましょう。

弘前(青森県)は慶長16年(1611)に城下町が建設され、小見世通りは18世紀中頃に形成されました。現在は、戦後の都市計画に伴う道路拡幅により、小見世通りの多くが消滅し、場末において部分的に残されています。

八戸(青森県)は寛永7年(1630)に城下町が完成しました。小見世通りは元禄年間(1688~1703)に形成され、昭和30年代の道路拡幅により消滅しました。



【図1-3-47 全国の雁木通りの分布】

雁木通りの形成と衰退に関する研究(菅原邦生)より

黒石(青森県)は明暦2年(1656)に城下町が建設整備され、小見世通りは19世紀中頃において城下に普及していました。黒石では現在、仲町を中心に古い小見世通りの町並みを見ることができます。仲町は、小見世通りの保存整備事業の先進地であり、重要文化財の高橋家を中心に、江戸以来の伝統的な町並みが住民主体で保存整備され、観光資源の一つとなっています。

米沢は伊達氏により城郭および城下が営まれ、その後入府した上杉氏により慶長13年(1608)から慶長14年(1609)にかけて大規模な拡張整備がされました。米沢の小見世通りは寛文4年(1664)から元禄6年(1693)において形成され、明治期には小見世下が占有化され、通路機能が消滅しました。

久保田(秋田県秋田市)は慶長12年(1607)に城下町が建設され、雪道(久保田では小見世が連続ものは雪道と呼ばれる)は18世紀後半までに城下に普及しました。現在は戦後の道路拡幅などにより消滅しています。

長岡(新潟県)は元和3年(1617)から元和8年(1622)に城下町が建設され、雁木通りは城下町建設と同時期に建設されました。現在でも高田同様、雁木通りの町並みが維持されています。

糸魚川(新潟県)は寛文年間(1661~1672)以前に城下町が建設され、雁木通りは18世紀中頃に形成されました。現在は、戦後の道路拡幅によりその多くが撤去されています。

若桜(鳥取県)は、慶長5年(1600)に城下町が建設整備され、城下町建設と同時期に仮屋通りが建設されました。現在は道路拡幅などにより撤去されています。

さて、私達の町高田の雁木通りは、どのような歴史をもっているのでしょうか。また、雁木通りの建設地域と城下町の都市構造との関係はどのようになっているのでしょうか。残された遺構や史料をもとにみてゆきましょう。

## 高田の雁木の歴史について

### 高田城下町と雁木通りの成立期

高田は慶長19年(1614)に松平忠輝が高田城を築城し、城下町が建設されました。

雁木通りの建設期については、松平光長時代(1624~1681)とされていますが、根拠は明らかにされていません。ここでは、まず雁木通りの建設期についてみてゆきます。

上越市立図書館榊原文庫蔵『寛永元年 出雲町伊勢町絵図』によると、屋敷地の奥行きは40間が多く、同図書館蔵『延宝七年 出雲町伊勢町絵図』と比べほとんど変化はありません。『延宝七年 出雲町伊勢町絵図』には道幅が4間と記され、現在の道幅と同様です。さらに雁木下は延宝年間において私有地とされ、上越市立図書館榊原文庫蔵『正徳年間 高田町各町記録』によれば、表町北端の下紺屋町に雁木が確認でき、寛保3年(1743)の記録(『高田市史 第一巻』所収)によれば、城下町建設後、公儀地である道路上に建設されたことがわかります。

以上のように高田の雁木通りは、城下町建設後、元和年間(1615~1623)に公儀地である道路上に雁木通りが建設され、正徳年間(1711~1715)までには整備されていました。また雁木下は、寛永元年(1624)までには私有地化されていたものと考えられます。

### 雁木通りの維持管理の歴史

建設後の維持管理については、『記録便覧』宝暦元年(1751)2月7日条によれば、

御町中雁木下八雪中八往来之事二候間、雁木雪二而破損無之様心付候旨、相触候事

とあり、冬期間における人々の往来を確保するため、雁木が雪で破損しないように藩が指示しています。さらに同書宝暦6年(1756)12月22日条によれば、雁木下を公用の仕事場として利用する際にも藩の許可が必要でした。



また同書安永6年(1777)12月22日条によれば、藩は雁木下の通行の安全性に配慮しています。すなわち藩は、雁木通りの通路機能の確保に積極的であったことが分かります。

一方、同書寛政4年(1792)5月15日条によれば、

須賀町社人近藤備前儀、唯今迄居宅町並二罷在候処、此度新二裏之方江引込家作仕度旨御願申上候、此儀乍恐御聞濟被下置候而ハ、自然他町之社家山伏中右様二裏尻江引込候而、第一御町並も見苦敷相成、其上雪中雁木続も不宣甚迷惑至極二奉存候、縦令此度備前家作之義御聞濟被下置候共、町並二雁木相建候而跡江引込家作仕候様被仰付被下置度奉存候、已来他町之例二相成不申候様被成下度奉存候、此段宣被仰上可被下候

以上、名主中

とあり、町並みにあった居宅を裏の方に引っ込んで家作したいとする須賀町(現在の仲町2丁目)の社人近藤備前の願いについて、町並み景観の連続性と雪の間の通行のため、連続した雁木を保つよう名主達が願い出ています。つまり、雁木が連続してはじめて機能を果たすという町人の意思が確認でき、18世紀後半において、雁木通りの実質的な維持管理は町人達によって行われていたことがわかります。

### 雁木通りの城下への普及

『記録便覧』宝暦6年(1756)条、安永6年(1777)条、寛政4年(1792)条には中屋敷町・善光寺町・須賀町の名が見られ、これらの町は、比較的城下のはずれに位置していることから、18世紀後半までには、雁木通りが城下に普及していました。

### 通路機能以外の利用

天保11年(1840)刊『北越雪譜』二編巻之一には、

雁木の下廣くして小荷駄をも牽べきほどなり、これは雪中にこの庇下を往来の為なり

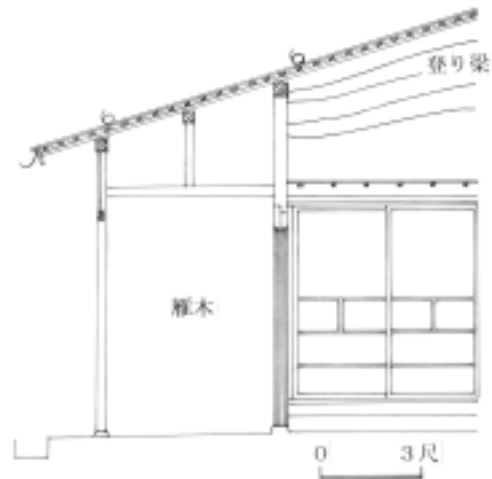
とあり、雁木下は、馬が荷物を引き、物資の輸送路でもあったことがわかります。

### 雁木の形式の変遷

ここでは、雁木の形式について、その変遷をみてゆきましょう。

寛保3年(1743)の記録によれば、「雪中歩行不自由に依て、後片庇を卸したる故」とあり、雁木の当初形式は落し式であったことがわかります。

19世紀初頭から中頃に建築され、建築当初から雁木が建設された、城下中心部の山岸家(現在の東本町3丁目)は、主屋屋根を道路に向かって延ばし、軒先に雁木柱を建てているものの、雁木部分は、いまだ造り込まれていません(図1-3-48)。造り込み式雁木は、厨子二階あるいは二階下を雁木通りとするため、山岸家の雁木は、造り込み式以前の形式ということになります。同様の形式は、19世紀中頃に建築された、城下中心部の金津家(現在の仲町4丁目)にも確認でき、さらに、米沢・山形など各地に確認できます。



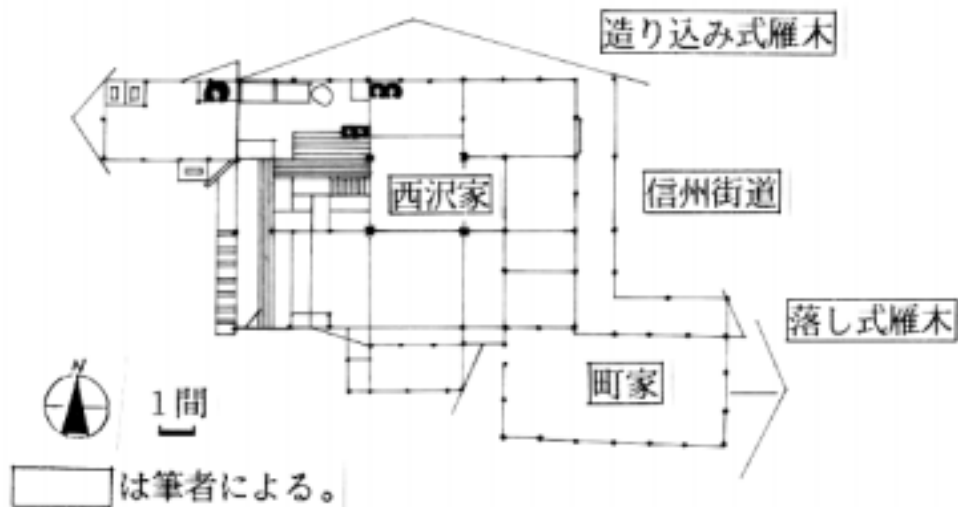
【図1-3-48 山岸家の雁木】

越後高田の雁木より

また上越市立図書館神原文庫蔵『家作画図入』には、安永5年(1776)から文久元年(1861)の家屋図面と敷地図面が合計10枚収められています。

その内2枚は下級武士の家屋、1枚が所在地不明の





【図 1-3-49 西沢家雁木平面図】

家作画図入りより

小規模な町家、7枚が城下南端の出雲町名主西沢家の家屋図と地割図です。

西沢家の7枚中、「天保十四卯年六月五日建前」の図面(図 1-3-49)には、西沢家の平面図とそれに隣接した町家の外形が描かれます。両町家は、直角に曲がる信州街道に沿って建てられており、主屋の前に雁木を設けています。まず西沢家の雁木は、以下の理由により、造り込み式雁木と考えられます。

主屋の屋根勾配と雁木の屋根勾配が一体の線で示されている。

主屋裏の軒桁の高さと雁木の軒桁の高さが一致している。

さらに西沢家に隣接した町家の雁木は、以下の理由により、落し式雁木と考えられます。

雁木屋根と主屋屋根に段差がある。

主屋の表と裏の軒桁の高さが一致している。

さらに 19 世紀中頃に建築された城下中心部の今井家は、厨子二階で、建築当初から造り込み式雁木が建設されました。造り込み式雁木が建設された背景には、主屋の発達に加え、当時すでに、高田の雁木下が、私

有地化されており、主屋前面の厨子二階の建設が容易であったことによるためです。

以上のように高田においては、雁木の当初形式は、公儀地である道路上に建設された落し式雁木であり、19 世紀以降、主屋屋根が道路に向かって延び、雁木下の私有地化を背景に、造り込み式雁木が建設されたと考えられます。

維新後雁木下は、私有地でした。また雁木下の幅が、2尺から4尺と狭い場合には、6尺に拡張されました。また本町通りにおいては、落し式雁木がハイカラであるとして普及しました。明治期に建築され、当初料亭として利用されていた旧広瀬家(現大島電機所有 本町6丁目)は、二階屋前面に、鉄板葺の落し式雁木が設けられています。

明治 42 年(1909)には「雁木取り壊し条令」が施行され、明治 43 年(1910)に五分一(現在の栄町)に開店した遊郭には、雁木が設けられませんでした。

大正元年(1911)には、雁木下の路面を舗装するよう県条例が出され、本町通りにおいて実施されました。大正元年頃の古写真によれば、落し式雁木と造り込み式雁木が確認できます。大正 4 年(1915)の本町 2 丁目の古写真によれば、落し式雁木であり、雁木の屋根は、鉄板葺と瓦葺が確認できます。同年の本町 7 丁目の古写真によれば、瓦葺の落し式雁木が設けられていまし

た。大正初期の本町2丁目付近の古写真によれば、木羽葺の落し式雁木であり、雁木下は敷石で舗装されていました。大正6年(1917)の今和次郎『見聞野帳』によれば、町東端の鍋屋町において、落し式雁木と造り込み式雁木が確認できます。雁木の屋根は、落し式雁木で、主屋同様、石置の板葺でした。造り込み部分は、格子窓が設けられ、居室として利用されていました。

以上のように高田の雁木通りは、城下町建設後、元和年間(1615~1623)に、公儀地である道路上に、落し式雁木が建設され、その後雁木下の私有地化に伴い、19世紀初めから中頃にかけて、主屋屋根を道路に向かって延ばし、軒先に雁木柱を建てた形式が表れました。この形式は、山形・米沢などにも確認でき、高田に限られたことではありません。ただ米沢の場合、雁木下が全て取り込まれ、通路機能が消滅してしまったのに対し、高田では厨子二階が建設され、造り込み式となり、通路機能が維持されました。高田においては主屋屋根を延ばすなどの占有化に際しても、通路機能を維持しようとする町の共同体的な意識が働いたものと考えられます。全国各地の城下町を対象に、雁木通りの歴史を調査すると、19世紀以降、多くの城下町で、雁木下が占有化され、通路機能が消滅しています。高田において、私有地にもかかわらず、通路機能が確保されたのは、町人が町の共同体的意識を背景に、自らの生活基盤を自らの意思で確立していったことを示しているといえます。また雁木の形式は近代以降も継承されました。

### 城下町の都市構造と雁木通りの建設地域

次に、文書・絵画史料から確認できる高田の城下町の都市構造と、その中で雁木の建設地域をみてゆきます。

高田城下町の配置構成は、寛文6年(1666)と推定される『越後様御城下絵図』によれば、城郭の周囲を武家地が取り囲み、町人地は、城の北・南・西側に配されています。町人地のうち商人町は、北陸街道に沿った表町、奥州街道に沿った中屋敷町・善光寺町、表町の西側に位置する西裏町などがあり、職人町は、表町

の東側に位置する東裏町などがあります。

寛永元年(1624)の記録などの検討により雁木が確認できる出雲町・伊勢町は伝馬町であり、『正徳年間 高田町各町記録』(1711~1715)の検討により雁木が確認できる表町は、旅籠屋が建ち並び、宿駅機能を基盤に成立した町でした。宝暦6年(1756)の記録(『記録便覧』所収)により雁木が確認できる中屋敷町、安永6年(1777)の記録(『記録便覧』所収)により雁木が確認できる善光寺町、さらに寛政4年(1792)の記録(『記録便覧』所収)により雁木が確認できる須賀町は、いずれも商人町でした。元治元年(1864)(『越後土産 二編 全』)の記録により雁木が確認できる鍋屋町と稲田町は、鍋屋町が職人町であり、稲田町は不明です。さらに19世紀中頃に建築され、建築当初から雁木が確認される今井家の所在地の東裏町は職人町でした。

以上のように高田の雁木通りは、宿駅機能を基盤に成立した町に建設された後、商人町や職人町にも建設されていったと考えられます。

『記録便覧』(『高田藩制史研究 第4巻、第5巻』 風間書房、1970年)

### サンサン通りの建設

昭和54年3月5日付『新潟日報』の記事によれば、本町3・4・5丁目の雁木通りは、本町商店街の人達によって、昭和40年代から整備を望む声が出てきました。旧来の雁木通りの幅(1.8m)では、増えた人出に対応できず、町の反映の足を引っ張ると考えられたためです。そのため市では、昭和53年からアーケードの整備に着手しました。

サンサン通りは、幅4.5m、高さ6mほどの鉄骨製で、アーケードの屋根には、採光用の天窗が設けられています。しかし、建設当初から、鉄骨製のアーケードは高田の風情にあわない、またコストが高く個人負担が大きいなどの批判が出たそうです。

また、本市においても全国の傾向と同じく郊外型ショッピングセンターの開発がすすみ、アーケードは整備されたものの、中心商店街からは客足が遠のくようになってきているのが現状です。

## 雁木通りの現状と問題点

雁木通りの現状と問題点については、上越市都市計画課が作成した『上越市 雁木のまち体系的整備調査』（平成13年3月）などに詳しく記載されています。

現在雁木通りは、町の多くで通りとして存在するものの、連続せず途切れた場所が多く、駐車場の設置や、新築にともなう雁木の撤去などが原因としてあげられます。また雁木内の段差が激しく、車椅子やベビーカーが通りにくいことなどが指摘され、改善の余地があります。

## 雁木のこれから

雁木通りは、雪国の町並みを代表する都市景観です。雁木通りの特徴は、都市という、権利が複雑にからみあう場所において、個人の利益を超え、私有地を公共の通路として提供する点にあると思われます。

これを可能にしているのが町の共同体的意識ですが、現代の都市の多くでは、個人の利益が優先され、全体としての調和を失ってしまっているのが現状です。ヨ・ロッパの町並みが日本に比べて魅力的なのは、コミュニティに根ざした、調和のとれた都市景観が維持されているためです。この調和の回復こそ、魅力的な都市を造る上で最も重要なことではないでしょうか。

雁木通りは、歩行者用の通路というだけでなく、町並みを整える上で重要な景観構成要素であり、雁木通りの保存整備を通して、調和のとれた魅力的な都市空間を形成することが可能です。雑然とした町並みにならされてしまった現代人にとって、雁木通りによってもたらされる整然とした町並みは、迫力をもって市民に迎えられると考えます。

それでは、雁木通りを利用して町を再開発するとしたら、どのようなことに注意したらいいのでしょうか。雁木通りは、町人の自律的な精神がもたらした、優れた都市遺産といえますので、その保存整備は、住民自身の手によりなされなければならないと思います。

また雁木通りは、多年にわたる住民の生活の知恵がぎっしりと詰まった雪国における生活文化の宝庫です。その歴史的価値は高く、再開発に伴い、雁木通りに対する安易な理解による、計画案が横行せぬよう留意し

なければなりません。そのためには歴史的基盤の上に立ち、現在の社会状況を重ね合わせた上で、計画案を策定する必要があるでしょう。

さらに行政と住民の積極的な対話も必要です。行政の期待する雁木通り像と住民の抱く雁木通り像では当然相違があり、形だけでなく、互いの立場を超えて、議論し、協力して保存整備することが不可欠といえます。

さらに雁木は、町家と一体化した都市施設であり、雁木の保存整備は、町家そのものの保存整備でなくてはなりません。高田のまちというと雁木が注目されがちですが、町家についても優れた遺構が多く現存しており、それらの活用の可能性も注目すべきであると思われるます。

たとえば、私が今回調査させて頂いた中で、本町6丁目の旧広瀬家(現大島電機所有)は、落し式雁木のみならず、近世町家の形式を受け継いだ建物であり、意匠化された渡り廊下や2階座敷の船底天井や床の間など料亭として利用されていた当手を彷彿とさせる優れた遺構といえます。

このような優れた雁木と町家の形式を残す遺構は、雁木通りに沿って多数存在しており、雪国の文化を発信する場として、またミニコンサートの会場やギャラリーとしての再利用の可能性もあると思われます。

旧来の姿をそのまま利用しようとするは無理があり、必ずしも妥当な解決策とはいえないでしょう。しかし、全く新しいものとするのではなく、残されたものを、どう見せ、どうアピールするのか、という姿勢を確立することで、町家とそれを繋ぐ雁木の町高田は、より魅力的な姿になると思うのです。

### 【参考文献】

- ・雁木通りの形成と衰退に関する研究(菅原邦生 1998年)
- ・『雪国と雁木通り』(氏家 武 1982年)
- ・『越後高田の雁木』(上越市教育委員会 1982年)
- ・『高田市史』(高田市 1958年)



### 寺町について

慶長 19 年(1614 年)、高田城が徳川家康の六男松平忠輝公の居城として築城されましたが、それに合わせて城下町の整備も行われました。儀明川の西側に寺院を集中させたのが、寺町の始まりと言われています。

特徴ある寺院群を上越のまちづくりに生かしていく方法を検討したいと思います。

寺町にある 63 の寺院については、寺町まちづくり協議会が発行している「上越高田寺町界限寺院ガイド、『寺町めぐり』」で紹介されています。

### 寺町のこれから

町の成立は政治、経済、文化(歴史)等、時の社会体制に大きく左右されるものですが、特に現代では、住民の生活を基本としてまちづくりを考えるべきだと思います。誰のための町なのか、主権者は誰なのかということをしっかりふまえておく必要があるでしょう。

当然のことですが、寺町寺院群を考える時、宗教を切り離して考えることはできません。しかし、日本人全体に言えることですが、その精神的な宗教離れが進み、現代人の宗教に対する考え方、特に生活の中での仏教への係わり方がどのようにあるのか、そこをしっかりと見据えないと、景観や寺院の境を整備することだけでは、寺町のまちづくりにはならないはずです。その寺院と市民との係わりを過去と現在を通して改めて見直し、今後百年の寺町寺院群をどのように考え、方向づけるかを検討していく必要があるように思います。

ちなみに、門のある寺院群を写真によって見ることが出来ませんが、その保存状態は、全てが満足いく状況ではありません。江戸時代から現代まで、その歴史の証言者でもあるこれらの建物は、大きな時代の流れの中で、現代の世相にそっぽを向かれ、朽ち果てるのを待っているかのようでした。

戦後めまぐるしく変わった世相の中で、各寺院がこれまで成立してきた背景が、今の寺町を見てみるとよ



【図 1-3-50 上越高田寺町界限寺院ガイド、『寺町めぐり』】



【図 1-3-51 寺町寺院マップ】

上越高田寺町界限寺院ガイド、『寺町めぐり』より



【図 1-3-52 寺町の寺院の門】



【図 1-3-53 境内地内の住宅】



【図 1-3-54 寺町ポケットパーク】

くわかります。

境内地に多くの住宅が密集し、閑静だったはずの寺院群の景観を著しく壊し、都市計画的にも無秩序な開発が今日まで尾を引いています。

また、境内地を利用した保育園や幼稚園等、それまでの宗教活動とは別に経済的な意味もあるのか、寺院が経営者としての方向を模索してきた様子もうかがえます。

歴史的建造物を生かしたまちづくりとして改めてその姿に目を向けてみると、我々が本来もっていたはずの精神的なよりどころとしての宗教心が薄れてしまったことに加え、寺院が経営者にならなければ、その維持すらままならなかったという現実があり、改めて市民生活と、寺院との係わりを考えさせられました。百年の計を考えると、大変難しい問題ではありますが、寺院が成立する背景をふまえ、まちづくりにどうか考えていかなければならないと思います。

**陸上自衛隊高田駐屯地について（南城町3）**

明治40年頃の高田では、陸軍の第13師団誘致に伴い、まちの全域で大規模な施設整備が行われました。

これらの施設は戦後、一時連合軍の宿舎として使われた後、昭和25年から警察予備隊、29年から陸上自衛隊（東部方面隊所轄）の施設として利用されています。

現在の高田駐屯地の場所は、明治期には野砲隊用地となっていたそうです。

**高田駐屯地にある歴史的な建物**

高田駐屯地の敷地内には、戦前からの建物として郷土記念館と倉庫が現存しており、今も現役の施設として利用されています。

**郷土記念館（明治42年）**

この建物は当初、将校の集会場兼講堂として使われていましたが、昭和41年頃からは、この地にゆかりのある13師団から現在の陸上自衛隊に関する史料を展示する郷土記念館となっており、希望に応じて公開もされています。

建物の構造は、木造平屋建て（梁間9.09m・桁行33.64m）、基礎は煉瓦積、外壁はドイツ下見板張、洋小屋トラス寄棟の屋根となっています。当初瓦葺きであった屋根は鉄板葺きに、木製上げ下げ窓は2段引き違いアルミサッシに変更されていますが、第13師団誘致当初の数少ない建築の一つです。玄関上部のペディメント風の庇と霧除けの持送り部分装飾、内部では腰壁や天井廻り縁、中心飾りなどに当時の洋風建築の特徴が見られますが、一部は建材などで覆われています。

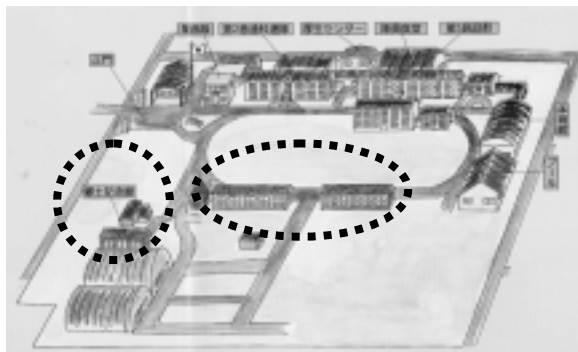
**38,39号倉庫（明治42年）**

木造2階建て（38号棟：梁間15.22m・桁行97.89m、39号棟：梁間15.45m・桁行108.11m）洋小屋



【図1-3-55 駐屯地正門】

高田駐屯地パンフレットより



【図1-3-56 駐屯地配置図】

高田駐屯地パンフレットにより作成



【図1-3-57 郷土記念館】



【図 1-3-58 38, 39号倉庫】

トラス切妻、瓦葺きの細長い建物です。当初、1階部分は厩舎でしたが、現在は倉庫及び事務室・宿泊室として使われています。何回もの改修工事で内部は改変されて、階段と腰壁、一部に露出している小屋組に当初の様子が見られます。1階下屋の北側は屋外から鉄骨控え柱で補強されています。

台帳上では明治39年の築

### 建物のこれからについて

郷土記念館は、屋根、開口部、内部造作などを修復し、傷みの進んでいる外壁などの維持管理に努めれば、広報施設としての一層の活用が可能ではないでしょうか。

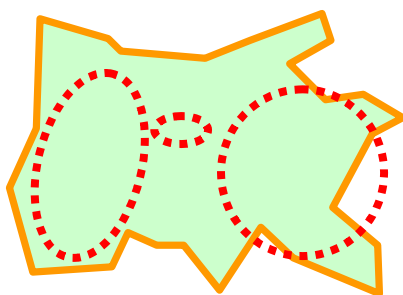
また、倉庫については現在も現役の施設として使われており、建物の用途上修復や保存移築は困難と考えられます。

### 【参考文献】

・『新潟県の近代化遺産』（新潟県教育委員会 平成6年）



## 1 - 4 その他地区





### 東部田園地域について

市の東部田園地域には現在も豊かな農村地帯が広がっています。これらの農村とそこに住む人々は、私たちの生活の基礎となる食糧の生産者として、またこの地域の主要産業である農業の担い手として重要な役割を担っています。このような都市を支える農村の役割は、春日山・福島・高田の城下町の時代から現在まで普遍のものといえます。

都市化が進む現在でも、古くからの街道沿いには、農村集落が点在しており、これらの集落を形成している屋敷林は、さながら水田の中に浮かぶ緑の島のように見えます。この屋敷林は、市街地の開発が進んだ現在では、鳥や昆虫、動物のすみかやえさ場として、移動の際の休憩所としての機能も持っています。

このような農村集落には、豊かな緑と立派な石垣に囲まれた広い敷地の中に伝統的な農家住宅が現存しており、神社やお寺、火の見櫓などと併せて古くからの農村集落の景観を形成しています。

### 西部中山間地域について

一方、市西部の中山間地域は豊かな森林地帯であり、私たち市民の憩いの場となっています。

市の西端に位置する桑取川流域の谷筋一帯は桑取谷と言われ、平野部の農村とは異なる伝統と民族文化を形成してきました。

集落は桑取川沿いの谷筋に沿って、川沿いの谷の底部や段丘状の山際に分布しており、現在も多くの伝統的な農家住宅が現存しています。

また中ノ俣地区は、市の西部に広がる森林地帯の真中にある集落で、豪雪地帯の上越市にあっても特に雪深い地区として知られています。集落は、中ノ俣川沿いの傾斜地に形成されており、そこにある住宅はほとんど全てとっていいほど伝統的な農家住宅となっています。集落単位でこれだけの農家住宅が残っている地域は、全国的にみてもまれであり、貴重なものであることは間違いのないと思われます。



【図 1-4-1 緑の島のような屋敷林】



【図 1-4-2 屋敷林の中の茅葺農家】



【図 1-4-3 桑取谷の茅葺農家】



【図1-4-4 北方の茅葺農家】



【図1-4-5 トタンをかぶせた茅葺農家】



【図1-4-6 農家住宅の間取りの一例】

歴史がつくった景観 久比岐風土記より



【図1-4-7 チョウナ梁】

## 農家住宅の現況

東部田園地域や西部中山間地域（桑取谷、中ノ俣集落など）では、伝統的な農家住宅が現在も住居として利用されています。

今回の現地踏査で確認した範囲で、茅葺の屋根が外から確認できた建物は、市内で十数軒ありました。しかし、茅葺屋根の上にトタン屋根をかぶせたものや、建物の一部を改修しているものの伝統的な農家住宅の形を残している建物までふくめると、極めて多数現存していることがわかりました。

今回訪問調査したお宅では、正確な建築年次がわかるところは無かったものの、所有者の方の話では、いずれも明治中期からそれ以前に建てられた、築100年以上を経過していると思われる建物がほとんどでした。

## 頸城平野の農家住宅の特徴

この地方の伝統的な農家住宅は、茅葺屋根の寄棟造が一般的で、多雪という風土を背景として様々な創意工夫がなされています。

建物内部は、土間の床で冬の屋内作業場として利用した「ニワ」、昔は馬などを飼っていた「ウマヤ」、食事や団楽のための多様室で囲炉裏がある「チャノマ」、その他「ネマ」「ブツマ」「ザシキ」などの部屋から構成されていて、地域などによって間取りや呼称に違いがみられます。

柱や梁は、積雪にたえるために太く、調査に伺ったお宅でも小屋裏を見上げると太い梁組みや茅葺屋根の構造をみることもできるお宅も多数ありました。

雪国の農家住宅の特徴的な構造としては、「チョウナ梁」が挙げられます。これは、雪国に育った樹木を有効活用したもので、傾斜地に育った根元が大きく湾曲した木材を梁に利用し、広い部屋を作る役割を果たしています。名前の由来は、大工道具のチョウナの形に似ていることからきているそうです。

代表的な民家形式として「中門造」があります。中門とは本屋から外へ突出した部分を指していて、つく位置やその機能も様々な種類があります。この形式は、新潟県から日本海側の多雪地方に沿って秋田県まで広く分布しており、上越地域（西頸城）は中門造分布の

西端にあたると言われていています。また、この中門造の形式は、頸城地方の中でも地域によっていくつかの類型があるそうです。

また、同じ豪雪地帯の農家住宅でも、雪への対応は地域特性に応じて様々な工夫がなされています。平野部と中山間部では建物や敷地に特徴的な違いが見られ、桑取谷や中ノ俣のように特に雪深い地域では、平野部の農家住宅と比べて主に次のような特徴を見ることができました。

- ・ 建物の土台が高い
- ・ 屋根の勾配が急である
- ・ 採光や煙出しなどのための高窓が屋根に付いている
- ・ 消雪池のための池を設けている

### カヤダノモシにみる互助の精神

茅葺屋根の住宅から伺い知ることができる昔の生活のあり方として、「カヤダノモシ」があります。これは屋根を葺き替える際にはたくさんの萱が必用で、一軒の家では確保するのが困難だったため、集落の人々がお互いにその人のために萱を供給しあう仕組みです。このように伝統的な建物からは昔の人々の助け合いの精神も知ることができます。

### 環濠屋敷

この他、建物自体の特徴ではありませんが、高田平野の農家の中には環濠屋敷という形態がみられます。これは、屋敷のまわりに濠、溝、小川等をめぐらしたもので高田平野全体に分布しているそうです。

成立時期は中世後期（上杉時代）から近世と幅があり、中世後期のものは山麓に分布していて、上杉時代の豪族の屋敷として当時の出先機関としての役割もあったと考えられています。また、近世に入ってからつくられたものは、力の象徴や美の様式であったといわれています。

このような環濠が設置された理由は、防御が主だったようですが、排水、灌漑にも利用されていたそうです。



【図 1-4-8 建物の後へ突き出た中門】



【図 1-4-9 北方の茅葺農家】



【図 1-4-10 建物内部からみた茅葺屋根】



【図 1-4-11 牧村のふるさと村】

## 頸城地方の農家住宅のこれから

### 深刻な過疎化・高齢化

現在茅葺の農家住宅にお住まいの方の話では、住まいとしての一番の特徴に夏の涼しさを挙げておられました。しかし、その一方で維持管理の大変さ、現代的な生活での使い勝手の悪さ、寒さ対策、開口部が少ないので内部が暗いといった不便さが目に付くのが現実のようです。

また、このような農家住宅がある農村地域では急激な過疎化や住民の高齢化が深刻な課題となっています。農家住宅の保存と活用と、農村地域のコミュニティの存続・活性化は表裏一体の関係にあるということができます。

### 農村活性化のための資源としての可能性

茅葺の農家住宅自体は、日本全国に多数分布し、全国でうまく活用されている事例がたくさんあります。

世界遺産に登録された岐阜県の白川郷の合掌造り集落はその最たるものですが、近隣でも牧村の「ふるさと村」、高柳町の「じょんのび村」などのように地域資源として活用されているものがたくさんあります。

しかし、今後はこのような観光資源としての活用に加えて、身近な生活ができる建物として農家住宅を再生することも有力な保存・活用策であると考えます。

近年、自然志向の高まりや、ゆとりと潤いのある生活を求めて、都市部を中心に農業・農村ブームが見られます。(週末農業、定年帰農など)現在、上越市でも、アーバンビレッジのように既存農村集落に隣接して新たな住宅団地づくりを行っていますが、今後は、伝統的な農家住宅を新たな付加価値として活かす方向も検討に値するのではないのでしょうか。

#### 【参考文献】

- ・『歴史がつくった景観 久比岐風土記』  
(久保田好郎 編著 文美堂書店 平成元年)
- ・『上越市史叢書VOL.4 桑取谷民俗誌』  
(上越市史専門委員会民族部会 平成11年)
- ・『越後の民家 - 上越編 - 新潟県民家緊急調査報告』  
(新潟県教育委員会 昭和55年)
- ・『上越地方の地誌』  
(新潟県社会科教育委員会 昭和53年)

## 1 - 4 - 2 旧街道沿いの町並み

(担当：市民研究員 吉川恵理子)

### 街道について

街道は公共の道路として多くの人々が行き交い、その沿線には古くから集落が分布し、旅人のための宿屋や店舗が集まった宿場町が点在していました。

街道の呼び名や区間は、時代や土地によって一定ではなく、厳密な区分はここではできませんが、市内を通る大きな街道としては、北陸道、北国街道、松之山街道などがありました。

北陸道は、金沢の前田家が参勤交代で利用する道ということで、加賀街道という呼称が一般的でした。江戸時代の「正保御国絵図」で、街道沿いの宿駅のうち本市域にあるものをみると、西から有間川、長浜、中屋敷、高田となっています。また、高田から東北方面へは稲田、春日新田、黒井を経て出雲崎まで続いており、奥州街道とも言われていました。

北国街道は、北陸地方一帯に同じ名前を持った道が多くありますが、ここでは高田から南の新井・二本木方面へ進み、江戸へと続く道を指す事とします。この道は、江戸時代には佐渡の金を江戸へ運ぶ為の道として重要な幹線道路でした。

また、松之山街道は、高田城下町の東の稲田から東頸城の方へ抜ける道で、たびたびルートが変わったそうです。

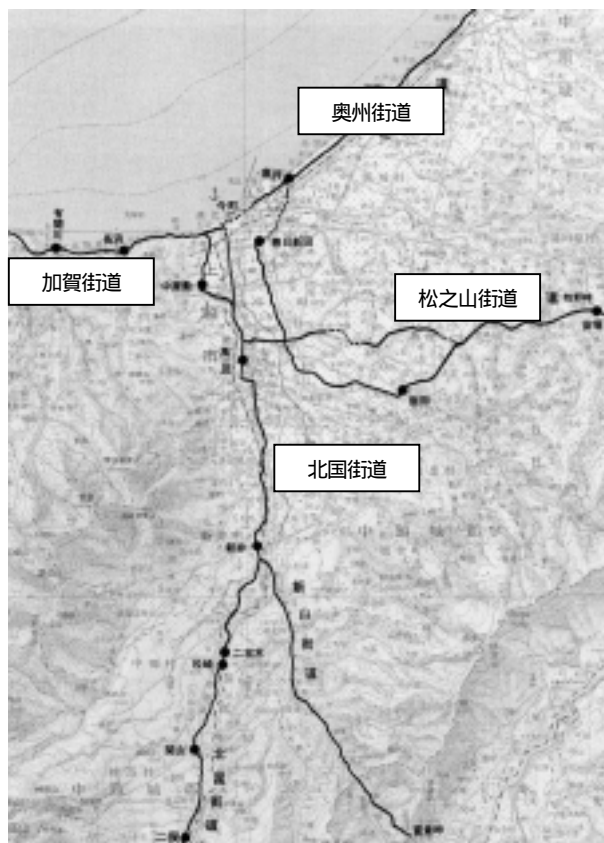
以上のような旧街道沿いには、現在もそれらの街道が賑わっていた当時を思わせる歴史的な建物が点在しています。今回の調査では以上の街道のうち、北陸道（加賀街道、奥州街道）と松之山街道沿いの町並みを街道沿いにたどりながら紹介したいと思います。

### 北陸道（加賀街道）

ルート：高田 土橋 木田新田 藤新田 五智

#### <土橋>

高田の町から加賀街道沿いに北上していくと、土橋の集落に立派なお屋敷があります。(写真1-4-13)これ



【図 1-4-12 街道概略図】

図説・新潟県の街道を基に作成（街道名は本文に併せ吉川追記）



【図 1-4-13 大杉屋惣兵衛家】



【図 1-4-14 木田新田の追分地藏】



【図 1-4-15 藤新田の土蔵】



【図 1-4-16 五智国分寺三重塔】



【図 1-4-17 春日新田の旧家】

は、第2部の東大の調査報告でも取り上げている大杉屋惣兵衛家住宅です。こちらのお宅は、翁飴などを製造している和菓子屋で、太く立派な木々や玉石の石垣に囲まれた敷地の中に、昭和初期の住宅と、明治期の蔵や工場があります。

### <木田新田>

木田新田には、追分地藏があります。追分とは道の分岐点のことで、ここには今町(直江津)方面へ続く道と加賀街道とを分ける道標があり、当時の人の往来を偲ぶことができます。

### <藤新田>

藤新田では、多くのお宅に土蔵をみることができます。それぞれの土蔵がつくられた年代は、明治期から戦後のものまで幅がありましたが、地元の方の話によると、昔は地主が小作人から集めたお米を土蔵に蓄え、相場の具合を見ながら売りに出していたそうです。土蔵の上部に付いている窓の扉には鏝絵(1-5-3参照)も付いており、趣のある農村集落の景観を形成しています。

### <五智>

五智地区一带には、五智国分寺や、居多神社、親鸞聖人上陸の地など多くの史跡が集まっています。古い寺社の趣や、豊かな緑の木々が広がる景観から、古代・中世文化に思いを馳せることができます。

### 北陸道(奥州街道)

ルート：高田 稲田 春日新田 黒井

### <春日新田>

春日新田は、江戸時代には宿駅として、また馬市のまちとして、人馬の往来で賑わいをみせていました。現在は、何軒かのお宅が古くからの姿を留めており、「かどの茶屋」や「なかの茶屋」といった屋号を持ったお宅も現存しています。中でもひとときわ目に付くのが立派な門を持った写真のお宅です。所有者の方の話によると、こちらのお宅は昔の庄屋で、母屋は明治4年以前の建物で、築130年以上を経過しているそうです。内部は広々とした吹き抜け構造をもっていますが、現



代生活でも快適なようにうまく改造されています。立派な門は、昭和11年につくられたもので、冠婚葬祭の時や、お盆にご先祖様をお迎えする際にだけ開放するそうです。

### <黒井>

黒井宿の始まりは、約400年前頃といわれ、越後府中（直江津）と奥州（東北地方）とを結ぶ奥州街道をつなぐ一番目の関所として栄えました。江戸時代になり街道が高田を経由するようになっても宿場町として多くの人に利用されてきたそうです。他より道幅が広いことが黒井宿の名残だそうですが、現在は車の往来が頻繁で、その面影を感じることはできません。

### 松之山街道

ルート：稲田 戸野目 長面 四辻町

稲田から東の戸野目方面には、高田城下と同様に雁木通りが続いています。また、それをすぎると大木や屋敷林を抱える小集落が点在しています。

戸野目には、上越地方最大の地主であった保阪家がありましたが、その屋敷の母屋は他の場所へ移転されて、後の1-4-2（補足）で紹介する金沢総本舗の店舗として利用されています。現在はその屋敷の一部を通り沿いに伺うことができます。

また、写真の小柳医院は、「格子のある家」として、平成11年度の市の景観賞に選ばれたお宅です。所有者の方の話によると、建物は築130年から140年経過したもので、元々は米問屋だったそうです。敷地600坪ほどの大きな屋敷は、現在、現役の診療所として利用されており、内部には、立派な座敷や、米蔵、手入れがゆき届いた庭園があります。先ほどの春日新田のお宅同様、大きなお屋敷を維持し、現役の建物としてうまく活かしておられる所有者の方に敬意を表したいと思います。

#### 【参考文献】

- ・『上越市史普及版』（上越市 平成3年）
- ・『図説・新潟県の街道』（郷土出版社 平成6年）



【図1-4-18 戸野目の小柳医院（外観）】



【図1-4-19 戸野目の小柳医院（内部）】



【図1-4-20 戸野目の小柳医院（庭園）】



## 1 - 4 - 2 (補足) かなざわ総本舗

(担当：市民研究員 関由有子)

### かなざわ総本舗(稲田4)について

稲田4丁目の和菓子製造販売店「かなざわ総本舗」の本店店舗は、戦後まで上越地方最大の地主であった戸野目の保阪家の母屋を移築したものです。また、同じ敷地内に隣接する土蔵は、東本町5丁目の個人宅の土蔵を移築したものだそうです。

### 建物の特徴

店舗建物は、総ケヤキ造りの豪壮大邸宅の面影を残して改造されています。妻壁の開口部や道路側2階部分の装飾格子、瓦葺の大屋根の棟から張り出している明かり取り越屋根は移築時に付け加えられたものです。売り場の吹抜は昔からのものですが、階段を新設しており、階上の一部もギャラリーに改造されています。また、売り場の奥にある和室の襖絵などは当初のものが使われています。

全体に古い建物の骨格を生かしながらも、老舗の和菓子店舗の印象を高めるために、意匠と仕上材を改めて選択し、必要な設備を設けて再利用されています。

### 建物のこれからについて

所有者の方は、この建物の価値を十分に把握し、愛着を持った上で、店舗として再利用することを考えておられたのが印象的でした。

歴史的な遺産を後世に伝える方法は様々ですが、経済的な裏づけがなければ、その維持管理にかかる負担は大きいものです。このように当初の形が変更されても、建物自体がしっかりと受け継がれていくことは意義深いことではないでしょうか。

伝統的な木造建築は、解体・移築や、曳屋移動などによって、所有者や建設場所、利用方法が変わっても、再利用することが可能ですし、その際に傷んだ部分を補修して建物の寿命も延ばすことができます。このようなケースでも、使い方に応じた改変も建物の歴史として残していく必要があると思います。

また、その際には建物の価値を正確に伝えていくことも大切です。民間の商業施設であっても、目に止まり



【図 1-4-21 かなざわ総本舗外観】



【図 1-4-22 かなざわ総本舗内部】



【図 1-4-23 かなざわ総本舗店舗】

やすい場所に銘版を設置するなどして、地域の身近な文化財としてその価値を示していく工夫が必要だと考えます。

## 1 - 5 テーマ別



### 西洋風な建物について

町並みを彩る西洋風な建物は、明治・大正期のモダンな雰囲気伝える遺構であり、都市の近代化の過程を知る上で重要な意味をもっています。ここではまちに残る西洋風な建物を紹介したいと思います。(ここでの「西洋風な建物」は、西洋風な意匠を凝らした町家から近代洋風建築まで、明確な区分けはせず広く捉えることとしています)



【図1-5-1 大島電機正面】

### 西洋風な建物の現況

高田では高田館や高田市庁舎など、多くの洋風建築が取り壊され、現存しているものは、旧師団長官舎(復原移築)、細幅会館など数少なくなっています。また、直江津ではそのほとんどが失われています。



【図1-5-2 大島電機内部(吹き抜け)】

### 事例紹介(高田地区)

明治維新後の高田は、主要な産業がなく衰退したものの、明治41年(1908)の陸軍第十三師団の入場により、町は活気を取り戻しました。そのような時代背景の中、高田の市街には多くの西洋風な建物が建てられました。

#### 大島電機本社(本町6)

所有者の方からの聞き取りによると、明治38年(1905)に建築され、建築当初は「牛丸」の屋号で牛肉の販売と洋食店が営まれており、軍関係のお客で賑わいをみせていたそうです。その後、昭和26、7(1951、52)年から、建物の所有者は現在の大島電機に移りました。

現在事務所として利用される主屋は、2階建の大規模な町家で、間口凡5間、主屋屋根は瓦葺き、下屋部分は平板鉄板葺きで、下屋屋根には表面にコ-ルターを塗っています。

配置は、道に面して主屋があり、通り庭を経て、儀明川に面した町家に至ります。



【図 1-5-3 大島電機正面の装飾】



【図 1-5-4 九谷焼の風呂場タイル】



【図 1-5-5 大島電機内部 (旧牛丸食堂)】

正面ファサードは、一階部分が、現在サッシがはめられるものの、以前は格子が設けられていました。

また、落し式の雁木が設けられ、雁木の屋根も平板鉄板葺きで、雁木下の路面には敷石が敷かれています。

2階部分は、擦りガラスの上げ下げ窓が設けられ、中央の窓上部には、三角型(トライアングラ-)のペディメントが、主屋屋根の軒下には持ち送りが付いています。(持ち送りは高田館などにも使われ、この時期の洋風建築によく見られます)また、上げ下げ窓上部の欄間には、リング状の欄間飾りが施されています。

現在、主屋の1階は、店舗件事務所として利用され、内壁は合板が張られるなど、当初の仕上げの多くが隠されています。また町家内部には2m四方のコンクリート製竪穴状の、牛肉の貯蔵場所があり、「牛丸」が営業していた時期には、ここに氷を詰めて、牛肉が腐るのを防いだそうです。また、金沢の九谷焼製の風呂場タイルには、鯉の絵や、スキーをする子供とスキー小唄が描かれるなど、しゃれた都市生活の一端が伺えます。

2階は、現在倉庫として利用されていますが、「牛丸」の営業期には食堂として利用され、モダンな雰囲気を残しています。

儀明川に面した町家は、座敷が二間設けられ、ともに床の間があり、桐の一枚板戸で仕切られています。

以上のように大島電機本社は、明治・大正期の生活様式を知る上で、代表的な遺構といえるでしょう。



## 旧師団長官舎（大町2）

旧師団長官舎は、明治43年（1910）11月に旧陸軍第13師団第3代師団長岡外史の邸宅として建築されたものです。設計者は陸軍経理部建築技手の加藤栄太郎、施工者は能生町の高鳥組です。かつては南城町3丁目にありましたが、現在の大町2丁目に移築復原され、市の文化財となっています。

建物は瓦葺の2階建てで、正面にはペアコラム形式の車寄せが付きます。1・2階の外壁には、上げ下げ窓がつき、上げ下げ窓上部にはペディメントが設けられています。

一階は、洋風で、玄関、男子応接室、書斎、婦人応接室、食堂、盆栽のための半温室などがあります。

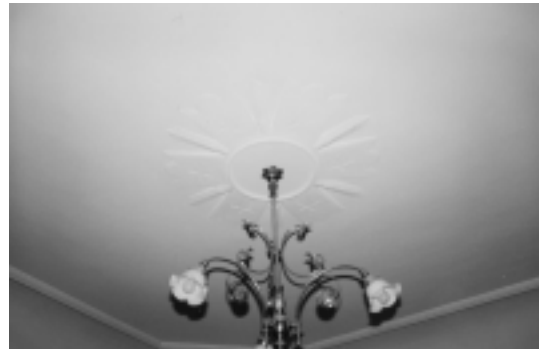
玄関のガラスには、アルゼン式の装飾を施した唐戸を配し、天井はメタル天井。男子応接室もメタル天井が設けられています。書斎は、内壁が空色に塗られ、腰壁が化粧羽目板で、天井には舟二燭の花電燈3個のシャンデリアが設けられ、シャンデリア周囲には中心飾りが施されています。婦人応接室は、内壁が桃色に塗られ、入口の合せドアの内側には楕円形の鏡がはられ、その上部の欄間部分には、他の官舎にもみられる幾何学的なステンドグラスがはめられています。天井にはシャンデリアが設けられ、中心飾りは大薔薇の花23輪を浮き出し、施工時一人の浮き出し専門の左官職人が20日かけて仕上げたものとされます。食堂は、一打式食堂（イチダース式食堂）で、多くの来客（お客を含めて12人）にも対応できます。内壁は、腰壁に化粧羽目板が用いられ、羽目板の一部は開き、台所から女中やボーイが、料理を運びいれていました。また食堂の床板は、アメリカ産のメリケン松が用いられています。

階段は絨毯敷きで、イタリックの2重階段となっており、階段の中頃に、花鳥浮模様のステンドグラスペーパーが貼ってあります。

2階は、和風で、床の間付の座敷・居間があり、水屋や半温室も設けられています。座敷・居間の窓には、大型各柄の障子戸がはめられています。また天井は、幅1尺5寸の杉柂板（信州小諸産）で、当時、各室には電気スタンドが設けられていました。



【図 1-5-6 旧師団長官舎】



【図 1-5-7 シャンデリア】



【図 1-5-8 旧師団長官舎内部】

以上のように1階部分を洋室、2階部分を和室とする和洋折衷は、当時、長岡式と呼ばれていました。

建設経緯の詳細については、明治43年11月2日付『高田日報』の記事によれば、明治43年(1910)7月に工事に着手、8月に柱建て、9月24日に上棟式を行っています。木材は信州小諸から運び、水害のため、工期が1ヶ月延びています。竣工間近に工事に関わった職人は、石工30人、左官20人、大工20人、ペンキ塗り6人とあります。総面積1330坪、建物坪数80坪、物置34坪、経費13300円とあり、当時としては最新の建築といえます。

明治43年11月14日付『高田日報』によれば、技手加藤栄太郎は、師団長官舎の設計に際し、長岡外史の指図に従って設計したとし、また高田地方の職人もこうした仕事に不慣れであった点を指摘した上で、外史の西洋建築に対する造詣の深さを賞賛しています。外史はヨーロッパ派遣の経歴があり、西洋の建築様式に対する知識があったためです。

以上のように師団長官舎は、上越地域において、明治期を代表する洋風建築であり、今後、上越地域の他の洋風建築をみる上で基準となる遺構といえるでしょう。

師団長官舎の保存については、明治期の貴重な文化財であり、後世に引き継ぐ必要があるとの視点から、官民一体となった保存運動を契機に、上越市が2年がかりで、移築復原したもので、平成5年に竣工しました。建物だけでなく、庭園についても復原され、往時の生活様式が窺えます。

近年、師団長官舎について、「小川未明文学館」(仮称)として利用することを柱とした提言書が、同整備検討委員会により報告されています。歴史的建造物をどのような形で利用するかは、社会的な背景もあり、一概には決められませんが、私個人の見解としては、文学者小川未明とは無縁である旧師団長官舎を未明文学館として利用することは再考の余地があると考えます。

### 細幅会館（西城町1）

大正2年（1912）に知命堂病院初代院長であった瀬尾原始氏の応接室として建築され、戦前にはダンスパーティーにも利用されていました。

その後、新潟県細巾織物協同組合の建物として利用されていましたが、平成13年に所有者の民間企業から上越市に寄附されました。

建物は瓦葺の2階建てで、1、2階の外壁には、上げ下げ窓がつき、その上部には簡素なペディメントが設けられています。

内部は、師団長官舎と似通った設えで、天井にはシャンデリアが設けられるなど、師団長官舎に劣らぬ洒落た造りになっています。

現在は上越市により、調査と解体移築計画が進んでいます。



【図1-5-9 細幅会館】



【図1-5-10 細幅会館内部】

### 高田日活(本町6)

高田日活は、明治44年（1911）に建築され、野口孝博の設計です。建築当初は、師団の軍人などを相手にする芝居小屋（高田座）でした。現在は成人映画を主に上映していますが、平成12年8月には、本来の上映プログラムのほかに、上越TMO事務局の主催による、景観劇場として、ニューシネマ・パラダイスなど、一般作品も上映し、これまでにない新たな試みがなされています。

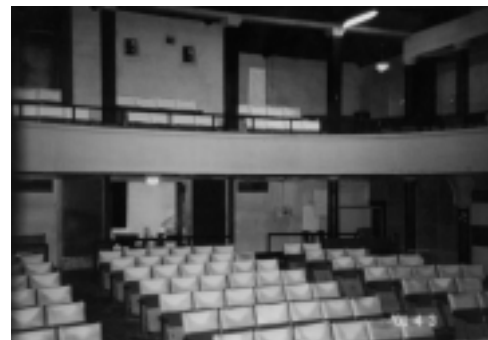
建物は2階建てで、軒飾りが設けられ、外壁はモルタル塗りで、上げ下げ窓が左右に2箇所、半円形の頭部をもつ窓が中央部に3箇所設けられています。また建物背面はトタンで覆われ、当初の仕上げは隠されています。

内部は、入って正面にスクリーンがあり、客席は一階部分と、張り出した二階部分に分かれています。1階部分には、やや狭い赤いシートの客席が、3列に並び、全体としてレトロな雰囲気を醸し出しています。

本町6丁目、7丁目の再開発において、高田日活の果たす役割は大きく、また映像文化を発信する都市装置として、今後の保存整備により都市文化の中核を担う、町のランドマークとして、重要な役割を担うものと期待されます。



【図1-5-11 高田日活（外観）】



【図1-5-12 高田日活（内部）】



【図 1-5-13 高逓回漕店】



【図 1-5-14 旧高田館（現存せず）】



【図 1-5-15 旧高田市役所（現存せず）】

## 事例紹介（直江津地区）

### 高逓回漕店（中央3）

この建物は、明治 25 年頃直江津銀行として建てられたもので、現在は高逓回漕店の事務所となっています。直江津銀行が大正 4 年（1915）に解散した後、残された建物を海運業高橋達太郎氏が購入し、現在地に移築したものです。

瓦葺きの平屋で、外形は変則的な五角形、3つの小屋根があり、外壁は白タイル張りとなっています。内部には銀行当時の木製のカウンターやドイツ製天井扇風機などが残されています。大正期には、頻発する火災に備えるため、建物周囲に長さ 95m、高さ 6m の赤練瓦をめくらせました。市内最古の洋風建築で、建物前面にはライオン像があり、これは東京三越のライオン像を真似たとされています。ライオン像の製作者は小川由廣（明治 13 年、柏崎市生）で、制作費は当時の金額で 2000 円だったそうです。

## 姿を消した洋風建築

### 高田地区

取り壊された洋風建築としては、明治 40 年（1907）建築の高田館、大正 3 年（1914）建築の高田市庁舎、大正 4 年（1915）建築の高田警察署、大正 13 年（1924）創立の高田ホテルなどがあります。

これらは、明治 41 年（1908）の第十三師団入場を契機とした当時の軍関係者を客層としたものであると思われます。

高田館は、明治 40 年（1907）に本町に建築され、第十三師団入場とともに、「高田館」と改称されました。将校や皇族などの宿泊にも利用されましたが現在は取り壊されています。建物は道に面して、主屋左に八角塔を、右に四角塔を配し、軒下には持ち送りがついていました。

## 直江津地区

直江津地区では、中央 1 丁目の宮崎写真館や駅前のイカヤ旅館が有名です。

宮崎写真館は、明治 44 年（1911）10 月 20 日に初代宮崎勇氏が開店したもので、建物のデザインは本人によるものです。高田両替町のやすね前で創業し、大正

3年(1914)頃に現在地に移築され、現在は取り壊されています。

2階建で外壁は下見板張り。窓は上げ下げ窓が設けられていました。窓のデザインは、宮崎家の家紋である矢羽がモチ - フとなっていました。玄関入口はモルタル塗りで、屋根面には、写真撮影を考慮し、採光用のスラントが設けられていました。

いかや旅館は、『いかや旅館上棟式』の古写真によれば、竣工は大正2年(1913)頃と考えられます。

瓦葺き2階建の主屋には、瓦葺きの八角塔が付いており、その外壁は、1階が漆喰仕上げ、2,3階は下見板張りで、建設当初はミルクホールや待合室として利用されていました。八角塔1階部分の柱の柱頭には、コリント風の飾りがついていました。

### 高田・直江津における西洋風建物の成立経過

高田・直江津の西洋風な建物で、現存するものでは、明治25年(1892)頃に建てられた高次回漕店が最も古く、その用途は官庁舎、ホテル、洋食店など、師団を相手にしたものが多く、それが特徴的です。

それらの成立時期は、明治後半から大正期にかけて集中しており、概ね以下の3時期に分けられます。

1. 銀行など特定の用途のもの(高次回漕店)

2. 明治末期の師団入場に伴うもの

軍人相手の商売を目的に、彼らの趣向にあった建物が建設された(高田館、いかや旅館、牛丸)

3. 官庁の建設に伴うもの

(高田市庁舎、高田警察署)

### 西洋風な建物のこれから

西洋風な建物たちは、明治・大正期に、都市が近代化してきた過程そのものを示しているものといえます。

高いデザイン性に裏打ちされたこれらの建築は、今後都市文化の発信基地としての役割を果たすことが期待されます。



【図1-5-16 旧イカヤ旅館(現存せず)】



## 1 - 5 - 1 (補足) 聖公会紅葉幼稚園

(担当：市民研究員 関由有子)

### 聖公会紅葉幼稚園（西城町3）について

礼拝堂北側の幼稚園舎は昭和50年に新築されて、昭和59年に学校法人聖公会紅葉幼稚園となりました。直江津の聖上智教会と同幼稚園も日本聖公会に属しています。

日本聖公会（英国国教会派）は鉄道の延伸に伴って伝道を進めたそうです。明治26年の東京直江津間開通を機に、明治29年に高田馬出町で伝道を開始し、明治45年に高田聖公会を設立しました。その後大正15年に高田紅葉幼稚園を開設し、翌年、高田降臨教会と改称されました。当時は高田本町通にあったそうです。昭和13年に現在地で礼拝堂が聖別されたという記録があります。

### 建物の特徴

W・M・ヴォーリスの設計による木造平屋モルタル塗り、瓦葺の教会は、赤いトタン葺の尖塔（正方形平面の出隅を落とした変則八角形）がシンボルです。ネオゴシック風の意匠を多用して、尖頭アーチが開口部や建具、腰壁に用いられています。礼拝堂内部は当初畳敷きでしたが、戦後床板に変更して長椅子が置かれています。教会堂南側の欄間にも尖頭アーチが連続して使われていますが、出窓部分は後に改修されたように見えます。ステージの額縁に施された透かし彫りはキリスト誕生の場面を表したもので、正面祭壇には和風の意匠も見られます。

### 設計者について

設計者ウィリアム・メレル・ヴォーリス（William Merrell Vories 1881-1964）はアメリカカンザス州に生まれ、明治38年に滋賀県八幡商業高等学校の英語教師として来日し、83歳で生涯を終えるまで近江八幡市に住み、キリスト教の伝道とその主義に基づく教育・出版・医療などで社会貢献活動を続けました。これらの事業を経済的に支えるべく建築設計会社やメン



【図 1-5-17 聖公会紅葉幼稚園外観】



【図 1-5-18 開口部の尖頭アーチ】



【図 1-5-19 透かし彫り】



【図 1-5-20 設計者 ウィリアム・メレル・ヴォーリス】

ソレータムで知られる製薬会社の企業活動を展開しました。明治41年にアマチュア建築家として建築設計事務所を開き、2年後には建築技師レスター・チェーピンと合名会社を創設しました。米国ミッション系を中心とする教会建築の他にYMCA、住宅、学校、病院や商業ビルなども手がけ、滋賀県と関西、東京に多くの作品が残されています。新潟県内ではこの高田教会のみですが、軽井沢・野尻湖の別荘や長野県内の聖公会教会堂も設計しています。

([www.biwa.ne.jp/~v-c/](http://www.biwa.ne.jp/~v-c/)より抜粋引用)

書籍では「教会が見える風景 W.M.ヴォーリスの足跡」(荒川久治著・地域デザイン研究所発行)に高田教会が紹介されています。

### 建物

日本の明治期から戦前までの教会建築は近代洋風建築の文化財として、明治村に移築保存されたものも含め、各地に残されています。国家を挙げて近代化を目指し、洋風建築の模倣から始めた時代と、キリスト教伝道の歴史を語る遺産といえるでしょう。現在も現役の教会として使われている建物は、様々な形で改修が加えられていますが、使われ続けることでその価値を維持できるものと考えます。建物本来の使用を妨げないように、地域の文化財としてその価値を紹介していきたいものです。

また、道路に面する塀など公共的な部分は、保存されたアカマツの維持管理とあわせて、門柱や礼拝堂の意匠と調和するような形に修景できるような方策が望まれます。



### 近代RC建築について

RC建築は、鉄筋コンクリート構造を指し、高田においては、学校など昭和初期に多く建てられています。高田のRC建築については、すでに『新潟県の近代化遺産』(新潟県教育委員会編、平成6年)など、優れた論考があります。

### 現況

高田・直江津地域におけるRC建築は、現在老朽化が進み、東北電力や第四銀行など、遺構の数は少なくなっています。

### 近代RC建築の事例紹介

#### 第四銀行

この建物は、元百三十九銀行の本店として建てられたもので、現在は第四銀行高田支店となっています。

旧高田藩士設立の「第百三十九国立銀行」は明治31年(1898)に私立銀行となり、株式会社「百三十九銀行」と改称され、その後昭和18年(1943)に第四銀行に併合されました。

昭和6年(1931)築の鉄筋コンクリート造り3階建て、上越地方では二番目の鉄筋コンクリート造りの建物です。設計と施工は清水組。外壁はレンガ風のタイル張り、2階から3階にかけてはイオニア式の大オ-ダ-があり、軒蛇腹が付きます。

内装は漆喰仕上げで、2階吹き抜け部分には、コリント風の柱が6本建っています。

道路沿いには、もともと建物と一体感をもったRC造りの雁木がありましたが、昭和56年(1981)の現在のアーケード設置時に取り壊されました。

#### 東北電力(株)高田営業所

上越地方で最初の鉄筋コンクリート造りの建物で、旧中央電気本社でした。現在は東北電力(株)高田営業所となっています。

建物は、建築技師、荒木左平の設計によるもので、



【図1-5-21 第四銀行(株)高田支店】



【図1-5-22 東北電力(株)高田営業所】



【図 1-5-23 大町小学校】

昭和2年（1927）竣工しています。

3階建てで、1階部分が徳佐石張付、2、3階はタイル張り。軒蛇腹はリシン仕上げで、クリスタイルの装飾があります。

内部事務室は、内壁が漆仕上げで、床はユ・ポリス塗、壁はキルク吹付ペイント塗仕上げとなっています。

### 大町小学校

昭和4年（1929）3月3日に北校舎と講堂が竣工されました。設計は長野宇平治が関与した可能性が高いと言われています。総工費は16万8800円。北校舎は3階建ての鉄筋コンクリート構造で軒蛇腹が付きまます。正面ファサードは、半円形の頭部をもった窓が3箇所設けられるなど、当時としては斬新な建物でした。内部は1階が会議室や校長室、事務室などが配され、2階が教室と図書室、3階が教室と第二音楽室となっています。字形に配し、正面ファサードを意識した配置構成となっています。また建築時の図面も残されています。

近年、老朽化に伴い、解体、保存の問題が表面化し、行政・建築の専門家・住民などとの協議の結果、全面的な改築と決定し、建物保存の難しさを浮き彫りにしています。

### 今後の保存と活用

RC建築は、移築保存が困難であり、再活用か解体かの2つの選択肢しかないように思われます。旧来の建物の歴史性を再認識し、モダンな建築として、再利用する時期に来ていると考えられます。

では、どのような形で再利用すべきなのでしょうか。建物の雰囲気を生かしつつ、使われてきた背景を基盤に、デザイン系の専門学校や、歴史的建造物の修復家を育てる学校など、その利用には多くの可能性があります。そうした可能性を、住民や専門家の間で話し合い、行政が経済的援助をするという姿勢も必要なのではないでしょうか。

### 鏝絵について

左官による建築への装飾は、家紋や屋号を蔵につけたのがはじまりとされます。鏝絵は蔵の戸前や戸袋、妻飾りにみられる漆喰装飾で、岩手県気仙地域、富山県射水郡小杉町周辺、鳥取県八頭郡周辺、愛媛県東予・今治地域、宇佐・安心院・日出地域、土佐地域、讃岐地域、新潟県上越地域などに多く残されています。

鏝絵の技術を美術品にまで高めた入江長八は、明治初期に多くの作品を残し、その弟子や各地の左官職人によって全国各地で制作されました。長八の作品は、明治10年(1877)の内国勸業博覧会に出品後急増、他の左官職人においては、明治中期と昭和初期に集中的に制作されています。絵柄は、「鶴」「恵比寿」「兎」「大黒」など一般的な絵柄が多いものの、「日清戦争の一場面」など時代性を反映したものもあります。

### 上越地域の鏝絵の現況

上越地域の鏝絵は、古くからの農村集落にたくさん現存しており、今回の調査では直江津・藤新田・上門前・灰塚などで集中的に残されていることが確認できました。

### 鏝絵の絵柄

直江津では、聖家族、等身女性像、天狗、竜などがあります。聖家族は、星野左官屋の蔵にあったもので、鏝絵中央に描かれるマリアは、二人の子供を抱き、その足元には、四人の子供が寄り添っています。体の具合が悪くなり、星野左官に逗留した流れの左官職人が、世話になったお礼に制作したものとされますが、星野氏本人の作との説もあり、製作者は明確ではありません。聖家族の鏝絵は全国的にもまれですが、現在は失われています。

藤新田においては、土蔵が多く、腰壁がなまこ壁などで仕上げられたものが多くみられます。鏝絵は、土蔵の扉とその上部の飾りに描かれ、絵柄は竜、唐獅子、波に鶴などが描かれています。

富岡では、波に亀と鶴、上門前では、唐獅子と牡丹、波に鶴などが確認できました。



【図 1-5-24 鏝絵】



【図 1-5-25 聖家族 (現存せず)】



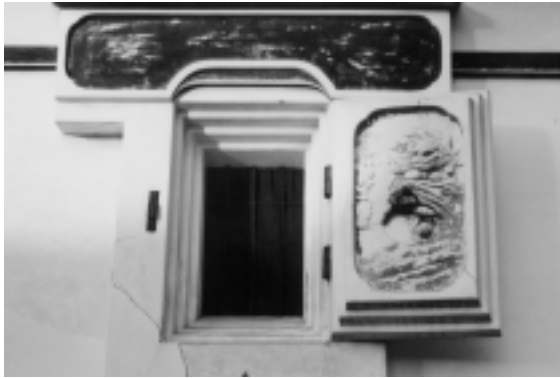
【図 1-5-26 マリア像 (現存せず)】



【図 1-5-27 天狗 (現存せず)】



【図 1-5-28 観音寺の龍】



【図 1-5-29 藤新田の土蔵の饅絵】



【図 1-5-30 藤新田の土蔵の饅絵】



【図 1-5-31 藤新田の土蔵の饅絵】

### 銭湯について

内風呂が普及する昭和30年代まで、銭湯は都市生活になくはならないものでした。ここでは、高田・直江津に残された銭湯をみてみましょう。

### 銭湯の現況

かつて高田・直江津には、山本湯、文化湯など多くの銭湯がありましたが、現在では、あづま湯・白山湯など数軒に限られます。

### 銭湯の事例紹介

#### あづま湯（中央5）

登記簿によると建築時期は大正7年（1918）で、トタン葺きの主屋前面には造り込み式雁木が設けられ、外壁は下見板張りで、現在はその上に化粧材が張られています。男湯入口には菱格子（カリ）が設けられ、その下の腰壁には白色のタイルが四半に張られています。

番台の後ろには、新しく上映される映画のポスターが張られ、社交場としても利用されています。

#### 白山湯（中央1）

トタン葺きの主屋前面には、造り込み式雁木が設けられ、雁木部分の腰板には菱型の淡い水色のガラスが入ります。男湯には松と川辺の男が描かれた九谷焼のタイル飾りがあります。壁は下が白タイルで上部が竹の節に似せたトタンで、薄い水色のペンキで塗られています。女湯は、厳島神社をモチーフとしたタイル飾りがあり、壁は男湯同様、竹の節に似せたトタンで、薄い水色のペンキで塗られています。脱衣所の天井には、名古屋で注文した鉄板製の天井飾りがあり、釜は、栃木で製造されたもので、「広沢式」と呼ばれるものです。白山湯は平成12年に解体されています。

上越市創造行政研究所市民研究員の佐藤和夫氏の調査による



【図1-5-32 あづま湯】



【図 1-5-33 あさひ湯】

### あさひ湯（南本町3）

外壁にはトタンが張られ、往時の様子は伺えません。雁木下には、映画のポスターがはられ、木製のベンチがおかれるなど社交場としての雰囲気を残しています。

銭湯のおもしろさは、単に銭湯としての機能だけでなく、社交場として機能を持ち合わせていたことにあるといえます。

### 銭湯のこれからについて

都市というのは「他人の世話にならなければ生きてゆけない場所」と考えることができます。家湯がなくとも、清潔でいられ、さらに流行りの映画の話や、町の文化を知る場所、そんな情報収集の機能は、家湯ではありえないことです。

「はだかの付き合い」とはよく言われることですが、温泉とも違う、都市文化の一つとして、銭湯を見直すことも必要なのではないでしょうか。